

金日成主席と日本

(上)

宋 日 昊

チュチェ104(2015)年8月

まえがき

2015年は、朝鮮民主主義人民共和国においては朝鮮労働党創立70周年および祖国解放70周年を迎える意義深い年であり、日本にとっては朝鮮封建王朝明成皇后を無残に殺害して120年、「乙巳5条約」を捏造して110年、さらには第2次大戦に敗亡して70年に当たる年である。

朝鮮と日本の両国がともに深い感慨をもって迎えたこの2015年の意味深長な歴史的時間の中でも、8月15日はとりわけ人々の深い追憶を呼び起こす日である。

1945年8月15日は朝鮮が日本の占領から解放された日である。朝鮮の占領支配を進めた人たちと暴圧に苦しんだ人たち、ひいてはその孫子たち、また侵略勢力を後押しした人たち、祖国の解放をめざして戦った人たちと彼らの戦いを支援した人たち、その孫子たちもこの日と深いかわりがあることは言うまでもないであろう。

ともあれ、8月15日は朝鮮と日本両国人民の命運に劇的な転換が起きた日である。

この日、朝鮮人は奴隷の運命から劇的に解放され、日本人は敗戦の悲劇を味わったのである。

あれから長い歳月が流れた今もなお、日本の朝鮮侵略は人々の歴史意識として脳裏に深く焼きつけられ、それを評価し総括する

動きも世代から世代へと引き継がれて止むことなく続いている。

日本の朝鮮占領と植民地支配が終焉の時を告げた日から今日に至る70年間の朝日関係は、時に改善の兆しを見せたこともあるが、総体的には悪循環の繰り返しであった。

善隣友好を願う両国人民の期待と努力にもかかわらず、反共和国勢力の世論操作により、拉致・核・ミサイル問題が両国の関係改善を阻む基本的障害であるかのように喧伝され、今なお不信と敵対感情、地域的緊張が解消されていないのは、悲劇と言うほかない。

とりわけわれわれの胸を痛めているのは、日本在留が4代を数える今日に至っても、在日朝鮮人が不当な政治的理由をもって差別され、迫害され、あまつさえ人間憎悪と弾圧の対象となり、基本的人権さえ蹂躪されていることである。

しかし、1945年8月15日から70年という長い年月を経た今日、新たな視座から歴史を振り返ると、あれほど大きな傷跡を残してきた日々にも、多くの年輪を刻んだ巨木さながらに、今も燦然ときらめく、心温まるエピソードが多々あることを見逃すべきではなかろう。

本書には、日本占領下における植民地民族——朝鮮民族の代表者、祖国の解放をめざして反日血戦の先頭に立った白頭山^{ベクトゥ}將軍^{キムイルソン}金日成主席が、あまたの日本人とどのような親交を結んでいたかが、あるいは主席の談話が、あるいは日本人諸人士の懐旧談が織り成されて叙述されている。

筆者は、自らの体験、新聞・放送の記録、主席の日本人諸人士

との会見の様、それら諸人士の所感などを収集し、その刊行を思い立ったが、70年の長きにわたる歴史の中に綴られた数知れぬエピソードを一冊の書にすべて収めることは到底不可能であると断念し、当面、朝鮮の解放70周年に際して、そのうちの代表的な約150話を選び上下二巻の本にまとめて刊行することにした。上巻には1945年8月から74年10月まで、下巻には75年4月から94年6月までの話が、主席が日本人諸人士と対面する写真を添えて収録されている。

本書が、朝日関係に関心を抱いている人たち、8月15日を忘れることのできない人たち、それに朝鮮と日本の後世の人たちが両国の関係史についての正しい理解を得るうえに多少なりとも参考となれば幸いである。

なお、本書が参照した資料は、『金日成全集』（朝鮮労働党出版社）、『主席 金日成』（日朝友好資料センター）、『労働新聞』その他である。

2015年8月15日

祖国解放70周年を迎えて

宋 日 昊

송일호

著 者 紹 介

宋日昊（ソン・イルホ）

1955年4月4日、平壤市^{ピョンヤン}万景台区域^{マンギョンデ}に生まれる。平壤市^{チュン}中区域の小学校、中学校を経て大学を卒業。1978～1981年、朝鮮人民軍将校。1981年、朝鮮労働党中央委員会国際部部員。1997年、朝鮮对外文化連絡協会勤務。1998年、外務省課長を経て副局長。2005年12月、外務省大使。1981年から現在まで34年間、日本との関係問題を担当。



1. 生家のしおり戸の前で

平壤市の牡丹峰公設運動場とその周辺の道路は雲霞の如き人波モランボンに覆われていた。木々の枝に登った人たち、牡丹峰の最勝台チェスンや乙密ウルミル台などの楼閣を埋めた人々……

「金日成將軍万歳！」

「朝鮮独立万歳！」

大会場の幹部壇に立つ金日成主席を仰いで上げる群衆の歓声はいやがうえにも高まった。

奪われた祖国を取り戻した青年將軍金日成主席が遂に祖国に凱旋し、人民の前に立ったのである。主席は10余万群衆の熱狂的な歓呼に手を振って応えた。

このように祖国の人民と熱い挨拶を交わした主席は、夢寐にも忘れなかった懐かしい故郷万景台マンギョндеに向かった。

乗用車は順和江の渡しの前に止まり、主席は船に乗り移ってふるさとの村へ向かった。万景峰の姫小松林の香気が漂うなか、どこからか、きぬたの音がかすかに響き、草原からは「モー」という牛の鳴き声が聞こえてくる。

生家のしおり戸の前に立ったその時、履物もはかずに飛び出してくる祖母の姿が目映った。いつしか顔に深いしわを刻んでいる、慕ってやまなかった祖母……

將軍となって帰郷した孫の胸に顔をうずめて、祖母はむせび泣

いた。

「父さんと母さんは、どこへ残して、独りで帰って来たんだ。……なんで一緒に帰らなかったんだい」

父さん！ 母さん！……

懐かしいこの言葉を聞いて、主席の目は涙にかすんだ。

そう、主席の両親はもはやこの世の人ではなかった。

両親だけではない。叔父も弟も、亡国の悲哀、日本帝国主義への憎悪を抱いたまま、大地を鮮血で染めて憤死したのである。

金日成主席の生涯は、朝鮮の近代史における民族受難の悲劇がとりわけ暗澹としていた1910年代に始まった。当時朝鮮は既に日本の植民地に転落していた。

主席は幼少の頃に、父金^{キムヒョンジク}亨 稷から朝鮮が日本帝国主義に奪われたのは無能な封建支配層のせいであると聞かされて彼らに憤りを抱き、祖国を取り戻すたたかいに生涯を捧げようと固く心に誓った。

民族主義者たちが、軍資金を募っては裏部屋に集まって酒を酌み交わし、亡国のうっぷんを晴らしていた時、主席は10代の若さで、父親の形見の2挺の拳銃をもって武装闘争に乗り出し、20代初めには、抗日武装隊伍を組み100万の関東軍を相手どってかずかずの激戦を展開し、想像を絶する苦難を乗り越えて30代の半ば遂に祖国の解放という歴史的大業を成就した。

祖国の解放なった1945年を前後して、金日成将軍の名声は朝鮮の北と南を問わず全国津々浦々に広がり、そうした中で麾下の隊伍を引き連れ、人民の歓呼に迎えられて祖国に凱旋したのであった。

しかし、その祝福すべき日を両親は見ることなく、異境の墓地に眠っていたのである。20年ぶりに故郷のわが家に帰った孫を迎え入れた祖母の心情は如何ばかりであったろうか。他方、万里他郷の無縁墓地に眠る両親の骨も持たずに生家のしおり戸を独りくぐる主席の胸のうちはなんと形容できようか。

主席は後日、その時の心情をこう回顧している。

「わたしはそれ以来、他家のしおり戸をくぐるたびに、このしおり戸を出て帰った人は何人で、帰れなかった人は何人だろうかと思うようになった。この国のすべてのしおり戸には、涙にぬれた離別のいわれがあり、生きて帰れなかった肉親に対するこみあげる懐かしさと、胸痛む喪失の苦しみがまつわりついているのである。

この地の数千数万の父や母、兄弟姉妹が祖国解放の祭壇に生命を捧げた。わが民族が、血と涙と溜息の海を渡り、砲煙弾雨をくぐって祖国を取りもどすまでには、36年もの長い歳月を要した。それは、あまりにも高価な代償を支払わされた血戦の36年であった」

36年という亡国の日々、主席の家庭は他のどの家庭にもまして、耐えがたい悲しみと苦しみにさいなまれた。

主席の父金亨稷は、1894年7月10日、万景台に生まれ、1926年6月5日、32歳を一期として世を去った。

生涯を反日闘争に捧げた金亨稷は、大衆を糾合してたたかい、そのさなか日本軍警に捕らわれて拷問にさいなまれ、出獄後またしても捕縛されて護送の途中逃走に成功したものの、極寒の中鴨^{アム}

緑江を渡り、その時全身凍傷にかかり重病を患ったが不屈にたたかい続けた。彼のその不屈の意志は『南山の青松』という自作の歌詞に歴々と表現されている。

主席の母康磐石は、革命に身を投じた夫に従って他郷に移り住み、女性として、人間として想像を絶する苦難にも強く耐え抜き、夫とわが子の革命活動を助けた末に重病を患い、身内の誰にもみとられることなく独りわびしく世を去った。

主席の叔父金亨キムヒョングォン権ナムと弟金哲柱キムチョルチュの最期も、人々の胸に日本帝国主義に対する怨恨と憎悪を呼び起こさずにはおかない悲劇的なものであった。

主席の祖母李宝益リボイクも日本軍によって満州の広野を引き回され、孫の金日成を懐柔して抗日武装闘争を放棄させろと強要されるなどの苦痛をなめた。

このように家庭的な面からしても日本に対する怒りが絶大であった主席が、祖国解放後の時点で日本人にいかに対するであろうかは、誰の目にも明らかなことのように思えた。

主席が幼年時代から抱いた対日感情には、政治問題、民族問題に劣らず、人間の問題、家庭上の問題も強くからんでいた。

だから、朝鮮が解放された当時、敗戦国日本を審判する立場にあった主席が、日本のそれと目星をつけた人物を随時断罪したとしても、至極当然のことと思われたであろう。

実際、日本の占領下に蒙った朝鮮人民の被害の大きさからして、人民の喪失の悲しみと怒りは何をもってしても鎮めることのできない状況にあった。それゆえ、日本人なら誰であろうとそういう

状況を是認し、悔悟すべきであった。

ところが、歴史は人々の思いとは違った方向に流れ、はたまた人々の想像を絶する偉大な人間の歴史が始まっていたのである。

2. 日本の共産主義者に表した敬意

1945年12月21日、吹雪が窓ガラスを叩いていた。

解放の喜びの中で年が暮れていくこの時、金日成主席は微笑を浮かべて深い思い出にひたっていた。

主席の前には数人の人々が姿勢を正して座っていた。彼らは日本人であった。

中国からの帰国の途次平壤に到着した彼らは、100万の関東軍を翻弄した不世出の愛国者金日成主席の謁見を希望した。

彼らの中には日本共産党のコミンテルン代表として活動していた野坂参三氏もいた。彼は第2次世界大戦中には中国の延安にあって反戦平和運動に尽力し、日本はもちろん、ヨーロッパとアジアの国々を巡って帝国主義と反動勢力に反対する革命闘争を展開した。

主席は骨肉の兄弟に会ったかのように彼を親しげに見つめ、こう語った。

「野坂参三同志は祖国を離れて15年ぶりの帰国とのことですが、その間さぞかし祖国が恋しかったでしょう。祖国を離れ、異国の地で生活し、たたかうというのは決してなまやさしいことではありません」

ベクトゥ
白頭の寒風にさらされながら強盗日本帝国主義を相手取って戦った偉大な将軍ならではの挨拶であった。

主席は語を継いだ。

「わたしは、日本の共産主義運動のために、長い間屈することなくたたかってきた野坂参三同志をはじめ日本の共産主義者に敬意を表します」

言語も民俗も歴史も異なり、つきつめて考えれば敵性国の人々であるにもかかわらず、彼が進めてきた反帝平和のたたかいを重視し、温かい国際主義的挨拶を述べる主席の前に彼らは深くこうべを垂れた。

彼らは感情を抑えて語った。

「われわれは、金日成将軍が日本帝国主義の100万大軍を向こうにまわして戦った名高い将軍であることを以前から存じていました」

主席は恐縮した。

「あなたがたは、わたしのことを日本帝国主義の100万大軍を向こうにまわしてたたかった名高い将軍として久しい以前から知っていたとのことですが、過分なお言葉です。われわれが強大な日本帝国主義に抗して長い間たたかうことができたのは、何といっても革命同志の愛と人民のあつい支持声援があったからです。わたしは解放された今も、人民の力を信じ、人民をよりどころにして新しい民主朝鮮を建設しています」

主席の言葉を聞く彼らのまぶたには、解放を迎えて建国の熱意に沸き立つ街並みや人々の様子がスクリーンのように流れていた。

人々の足どりも解放の喜びに沸き立っているように見え、工場にも、農村にも未来への希望があふれていた。

北朝鮮に入った瞬間から、解放の喜びを抱いて建国の熱意に沸き立つ朝鮮人民の闘争ぶりを見て大いに感動したという彼らの所感に主席は、これはわれわれの事業に対する大きな支持、鼓舞になるとして、新しい民主朝鮮の建設に向けて力強くたたかっている北朝鮮の実情について次のように語った。

——解放後、ソ・米両軍の進駐によって南北朝鮮に生じた相異なる政治情勢は、南北朝鮮でそれぞれの地域の特性に即して建国事業を推し進めることを求めている。われわれは解放後、初の事業として、10月10日に北朝鮮共産党中央組織委員会を創設し、党の創立を宣言した。共産党の創立によって、われわれは新しい祖国建設のための政治的参謀部を持ち、広範な大衆を奮い立たせて、建国事業を力強く推進することができるようになった。

今、北朝鮮の各地で、人民の創意によって地方政権機関である人民委員会が組織されて活動しているが、われわれは人民委員会と北朝鮮行政局を強化し、それを基礎に北朝鮮臨時人民委員会のような中央政権機関を創設する考えである。わが党は治安を維持し、破壊された民族経済を復旧し、零落した人民生活の安定、向上をはかり、土地改革をはじめ諸般の民主改革を実施する準備も着実に進めている。

朝鮮人民は、民主建国という未踏の道に横たわる難関と障害がいかにも多くても、自分の選んだ進歩的民主主義の道を歩み、必ず自力で富強な民主主義的自主独立国家を建設するだろう。——

こう語る主席の眼光は勝利の確信に燃えていた。

主席は、人民の高い建国熱意と創意性に頼るなら、いかなる困

難な課題も遂行し、わが国を富強な民主主義的自主独立国家に建設することができるかと確信しているとして、話題を国際情勢に移した。

——第2次世界大戦でファシズム・ドイツとイタリア、軍国主義日本が敗北し、反ファシズム民主勢力が勝利することによって、国際情勢には大きな変化が起こった。世界の政治的力関係は、反民主勢力がはなはだしく弱体化し、民主勢力が強化される方向で再編成されている。しかし、他国を従属させようとする帝国主義者の策謀は続いており、反動勢力と民主勢力の間には依然として熾烈な闘争が展開されている。戦後のこうした世界情勢は、人類にファシストの残存勢力と帝国主義勢力を徹底的に粉碎し、平和と民主主義のための闘争をさらに断固として展開することを求めている。わが国の実情からしても、また世界的領域からみても、今日、平和と民主主義のための闘争を展開するうえで、アメリカに対する幻想をなくすことが大切だ。アメリカは第2次世界大戦で「連合軍」に参加しはしたが、これといった役割を果たしていない。アメリカは「連合軍」への参加を約束しておきながらも、いろいろと口実を設けて自己の国際的義務を誠実に果たさなかった。アメリカは「連合軍」の合意によって第2戦線を形成することになっていたが、それを故意に怠った。アメリカは、太平洋戦争が日本帝国主義の敗北として終結しつつあった8月、広島と長崎に原爆を投下して数十万の罪なき日本人民を残酷に殺傷し、数多くの人々に苦痛をなめさせた。アメリカが日本に原爆を投下したのは、世界の人々に原爆に対する恐怖心を抱かせ、力の優位を示威し、「戦勝国」としてのより高い地位を占

めることにその目的があった。いま米軍は日本に進駐して主人がましくふるまい、民主主義を求める人民を弾圧している。米軍の南朝鮮駐留によって朝鮮半島の情勢も複雑をきわめている。また、米軍は日本軍の武装「解除」を名目にして南朝鮮に上陸し「解放者」としてふるまいながら、人民の創意によって各地方に組織された人民委員会を強制的に解散させ、軍政を布いている。米軍は軍政に服従しない者は軍法によって処刑すると公言し、人民の民主的進出を苛酷に弾圧している。諸般の事實は、「自由」と「民主主義」を喧伝しているアメリカに対して絶対に幻想を抱いてはならないことを示している。われわれは、人民がアメリカに対する幻想を抱くことのないよう深い注意を払っている。日本は朝鮮の隣邦であるため、われわれは戦後の日本の情勢発展に特別な関心を抱いている。——

ここで野坂参三氏らは、日本は今後軍国主義復活の道を歩んではならず、必ず民主化の道へ進むべきだという自分たちの見解を述べた。

主席はその見解に全的に同意し、こう続けた。

「日本が民主化の道へ進むなら、日本人民だけでなくアジア諸国の人民と世界の平和愛好人民に支持されると思います。われわれは、これから日本が平和と民主主義の道へ進むよう望みます。

日本の民主化を実現するには少なからぬ難関があるでしょう。

第2次世界大戦における日本帝国主義の敗北と反ファッシュヨ民主勢力の勝利は、日本の情勢を根本的に変え、日本人民の革命闘争に有利な局面を開きました。しかし、戦後の日本には米軍が占領軍として駐留しており、軍国主義の残存勢力と資本主義的・封

建的關係が依然として残っています。このような状況下で日本が民主主義の道に進むためには、何よりもまず日本人民が民主政權の樹立をめざして果敢にたたかうべきだと思います。要は、民主政權をどのように樹立するかということです。もちろん、これは日本人民自身が決定すべき問題です」

主席は、日本を民主化するうえで共産党の任務が重要である、日本共産党は合法的に活動できるようになったのだから、この機会を効果的に利用し、党の隊伍をしっかりと固め、その地位を強固にすることに力を入れるべきだとして、あなたがたは日本共産党を祖国と人民に奉仕する大衆的な党に発展させるべきだと言われたが、正しい意見だと支持を表明した。そして、現在の日本の政治情勢に照らして、広範な民主勢力を結集するために大衆団体を広く組織し、統一戦線組織を結成すべきだと語る野坂参三同志の見解を全的に支持し、職業別、階層別の大衆団体を組織し、あなたがたが構想している民主戦線のような統一戦線組織を結成すれば、労働者、農民をはじめ各階層の広範な民主勢力を強く結集することができるであろうとの確信を表明した。

主席の指摘に力を得た彼らは、真剣な面持ちで主席に要望した。それは日本居留民の帰国問題であった。

彼らの気持ちを汲んだ主席はほほ笑んだ。

「あなたがたが関心をもっている日本居留民の帰国問題について簡単に述べましょう。

われわれは、帰国できずにいる日本人の生活上の便宜と帰国の実現をはかって各方面から努力しています。朝鮮人民は決して日

本人民を敵と考えたことはありません。朝鮮人民が今まで敵と見なし、反対してきたのは日本帝国主義です。

ところが、いま日本人の帰国実現で問題となるのは、38度線を境に南北にソ・米両軍が駐留していることです。われわれに輸送手段が不足し、一部の地域に伝染病が発生した一連の事情もありますが、より肝心なのはソ・米両軍の司令部が日本居留民の帰国問題を解決するため、いかに努力するかということです。われわれはソ連軍司令部と協議して日本居留民の帰国が一日も早く実現できるようにします。そして北朝鮮に残留することを希望する日本人に対しては、その希望と技能によって職場を斡旋し、生活の安定に必要な対策も講じることにします。これはわれわれの果たすべき人道的な措置です」

主席の言葉に一行は、我知らず嘆声をあげた。

野坂参三氏は席から立ち上がり、興奮した面持ちで謝意を述べた。

「本当にありがとうございます。われわれは日朝両国人民間の友好関係を発展させるため極力努力します」

金日成主席は、それは立派な決意だ、われわれもともに努力すると力をこめて言った。

彼らが辞去する時間になった。

誰もがみな主席との別れを惜しんだ。そういう彼らを見回し、主席は深い思いをこめて語った。

「いま南朝鮮はアメリカの軍政下にあるので、あなたがたの帰国にはいろいろと複雑な問題が提起されるでしょう。われわれは、

あなたがたが38度線を越えて無事に帰国できるよう必要な対策を講じます。そして、あなたがたの活動に多少なりとも力ぞえをするため、わずかではありますが、お金も差し上げたいと思います。同志的誠意として納めていただければ幸いです。

われわれは38度線まで、あなたがたをお見送りします。

あなたがたの健康をお祈りします」

当時主席は国づくりに忙殺されていた。

若い詩人李^リ燦^{チャン}が「将軍は忙しい。忙しくなければならない」とうたったように、解放朝鮮を導く金日成主席は寸秒を惜しむ身であった。にもかかわらず、彼ら日本人のために貴重な時間を割き、別れに際してはこのように格別の配慮を示したのであった。

野坂参三氏一行の感激がいかに多かったかは推察に難くないであろう。

3. 「嘆願書」を持って現れた日本人学生

漆黒の闇の中で春雨がしとしと降る38度線を越えて行く青年がいた。警備のソ連軍衛所の灯火を右手に見ながら夜を徹し、泥まみれになり、這うようにして越境している彼は日本人学生金勝登だった。

旧満州育ちで、東京に勉強に来ていた彼は、1945年8月15日、日本の敗戦によって親兄弟との連絡を絶たれ、不安な日々を送っていた。

当時、彼と同じような境遇の学生が集まって「在外父兄救出学生同盟」を結成し、彼は「実践部担当委員」として活動した。

解放を迎えた朝鮮人はやがて訪れる冬も喜んで迎えるであろう。ところが、敗戦国の人々はそうはいかなかった。本国に帰れず、朝鮮でまた冬を送らなければならない日本人にとってこの冬はひとしお苦になるであろう。一刻も早く朝鮮に残留している同胞を帰国させないと、寒さのきびしい北朝鮮での越冬は大変だろうという切迫感に駆られた彼は、たとえ死んでも北朝鮮に入り、金日成将軍に直訴し、一日も早く在留邦人が帰れるよう陳情しようと決意した。

24歳という若い体内に流れる血は強く脈打っていた。

彼は、通称吉原光蔵という在日朝鮮人の手引きで1945年5月末、アメリカ軍のLST船で博多から南朝鮮に帰る朝鮮人の一団にまぎ

れこんだ。

こうして38度線についたのは東京を出てから7日目だった。人々の目を避けるために、境界線突破は雨の降る夜を選んだ。

幸運に恵まれ、ついに平壤に到着した彼は、捕まえられるのを覚悟で、金日成将軍がいるという北朝鮮人民委員会の門に走り込んだ。

たちまち捕らえられた。彼を制止したのはまだうら若い三八式歩兵銃を持った歩哨の兵隊だった。

驚いたことにその兵士は彼の用件を聞いて、「北朝鮮は民主主義の国だから東京から来た学生さんでもきっと金日成将軍に会えますよ」と流暢な日本語で話すのであった。彼は夢かとわが耳を疑った。

金日成主席の謁見が許されたその日は、1946年6月3日だった。主席のかたわらにいた秘書官も巧みな日本語で「どうぞお話しください」と促した。金勝登は大きな声で金日成将軍に訴えた。

「いま朝鮮にとり残された日本人は、食糧もなく、病気がまんえんし、自由に旅行したり、仕事をすることもできません。一日も早く日本に帰れるよう閣下のご配慮を切にお願いしてやみません……」

その声は震えていた。

主席は彼の複雑な心理を瞬間に把握したかのようにほほ笑んだ。

「戦後の困難で複雑な時期に、日本からはるばる来訪するのは大変だったでしょう。

あなたが同胞愛を抱いて、北朝鮮に残留している日本の同胞の

帰国を実現させようとわれわれを訪ねてきたのは、殊勝な行いで
す」

主席はソウルの「日本人援護会、会長の「嘆願書」を受け取ったとし、わたしは、北朝鮮にいる日本人の帰国を実現させようとする会長の嘆願と、「在外父兄救出学生同盟」の意思を反映しているあなたの切なる願いを十分理解できる、と温かい口調で語った。

彼はわが耳を疑った。

主席の言葉を通訳する秘書官の口元を彼はまばたきもせず見つめていた。

主席は語を継いだ。

「北朝鮮にいる日本人の帰国を実現させることは、日本人民の切なる願いであるだけでなく、わが北朝鮮政府と人民の意向でもあります。

今しがたあなたは、北朝鮮にいる日本人の苦しい立場について話しましたが、われわれも彼らの苦しみはよく知っています。

こんにちの北朝鮮の厳しい食糧事情やその他の問題からしても、日本人の残留は朝鮮人民にとって決して望ましいことではなく、かえって負担になると言えるでしょう。けれども、われわれはこれまで人道的立場に立って日本人の身の安全をはかっており、彼らの帰還を許可し支援しています。

解放後、朝鮮人民が日本人に冷たく当たったことや、一部の保安隊員が不法脱出を企てた日本人に対して取った行動について言うならば、それは過去、日本帝国主義者からあらゆる民族的蔑視

と迫害を受けてきた朝鮮人民の積もりに積もった民族的うっ憤の噴出であったと理解すべきです。

北朝鮮に駐屯している一部のソ連軍兵士が日本人に暴行を加えたこともあったと言いますが、それは彼らが日本の侵略軍と交戦関係にあった兵士であることを考えれば、あり得ることだと思います」

主席は深い思いに沈み、やがて語を継いだ。

「朝鮮人民は、わが国を占領し36年にもわたりあくどい植民地支配を実施した日本帝国主義支配層に反対しているのであって、決して日本人そのものに反対しているわけではありません。まして朝鮮人民は、在日100万同胞の帰国を実現できずにいる不幸を抱いているだけに、北朝鮮にいる日本人の苦痛は理解しており、彼らの帰国実現を支援するつもりです。

今アメリカ軍政は、北朝鮮に残留している日本人が南朝鮮地域を經由して帰国するとなれば防疫上の問題が生じると言って、帰国を妨害していることはあなたも承知のことだろうと思います。しかしわれわれは、日本人帰還の問題はソ米両軍側とも積極的な交渉を行い、可能な限り努力して帰国が一日も早く実現されるようにする考えです。目下の状況で日本人全員を一度に帰国させるには輸送能力が追いつかず、その他にも困難が多々ありますが、安全に帰国できるよう最善の措置を講じるつもりです」

主席は一語一語力をこめて語った。

前に立っている日本人はどこにでも見られるごく平凡な学生だったが、主席は、前触れもなく駆け込み、直訴の挙に出た行動を

いささかもとがめず、彼の肩を軽く叩いて言った。

「政府としては、日本人帰還の問題が正式に解決されるまで、残留している日本人の身の安全と生活上の便宜をはかることにします。

あなたは今、北朝鮮では食糧不足で労働者、事務員に食糧を満足に供給できない状況にあっても、日本人には食糧を配給し、貨幣も交換してやっていることを大変ありがたいと思うと言いましたが、そういう気持ちなら結構です。われわれは日本人を差別せず、北朝鮮に永住しようとする日本人には永住権を与え、外国人待遇も与えるでしょう。職を求める日本人には、それぞれの技術と希望に応じて職も斡旋することになっています。

朝鮮人民と日本人民との親善をはかり、社会の民主化を実現するうえで、新しい世代の役割はきわめて重要です。これからいっそう勉学に励んで日本社会の民主主義的発展と、朝鮮人民と日本人民との友好関係の発展のために努力してくれるよう期待します」

彼は涙があふれ出るのを抑えようがなかった。その手の甲には涙がしたたり落ちていた。

主席は感激している日本青年を見つめ、「あなたが安全に帰国できるよう、われわれの当該機関に手配します」と言った。

主席は約束どおり、彼が日本に安全に帰国できるようこまごまと気を配った。

ほどなく、日本居留民の送還が本格的に始まった。



4. 日本人妻の喜び

朝鮮全国が解放の喜びと建国の熱意に沸き立っていた。医師李^リ炳^{ビョン}輝^{フン}一家も大きな喜びにひたっていた。

祖国の解放前、貧しくても向学心が強かった李炳輝は、親類の援助を得て京^{キョン}城^{ソン}医専を出た。

学問によって朝鮮人の優秀さを示してみせるという民族的自負をもって医学の研究に精力を傾けた彼は、20代にして博士論文を書き上げた。

しかし、博士論文を日本名で出すことを強要されて憤激した彼は、名誉をかなぐり捨て、自力で前途を開こうと決心し、生まれ故郷のソウルを後にして平^{ピョン}壤^{ヤン}に移住した。

ここで彼は、5年契約で銀行から高利で多額の金を借りて、中国人が経営していた大同江畔の3階建ての料理店を買い取り、病院につくり変えた。

ここに「李炳輝外科専門病院」の看板を掲げて開業した彼は、日本の軍人や手先からは高額の治療代を取り、貧しい労働者や農民は低額で、時には無料で治療した。

こうして祖国の解放を迎えた李炳輝は、金日成將軍の凱旋演説を聞き、希望に燃えて、自分も国づくりに一役買おうと心に誓った。

李炳輝には西本春子という貞淑な日本人妻がいた。

彼女は、貧しい農家の生まれで、8人兄妹の末っ子であった。幼くして両親をなくし、長兄はブラジルへ移民し、残った兄妹は生活苦にあえいだ。彼女は、自分がいなければ家庭の負担が少しは減るだろうと考え、19歳の身で単身朝鮮へ渡った。

彼女はある病院の看護婦になり、ここで李炳輝と知り合い、結婚した。

朝鮮の解放を迎えた時、彼女は一抹の不安を覚えた。日本人の自分が解放された朝鮮の地で心置きなく生きていけるだろうかという思いだった。ただ、夫の自分に対する態度にはなんの変化もなく、相変わらずやさしくしてくれるのが不思議でもあり、心強くもあった。

金日成主席の凱旋演説を聞いたその夜、「…知識のある人は知識で、金のある人は金で。まさにそのとおりだ。ぼくにも愛国的良心はある。何をくよくよすることがあろうか」と口走り、部屋の中を行ったり来たりする夫の姿を眺めていると、彼女の心のしこりも取れていくようだった。

李炳輝は妻にきっぱりと言った。

「病院を国に納めよう。ぼくの医術を祖国のため、人民のためにそっくり捧げたいのだ」

春子があっけにとられた。平素無口な、感情を表に出すことがほとんどない夫がどうしたことだろうか、と思ったのである。

ところが、それから間もないある日、彼らの情熱と喜びは一転して不安に変わった。彼らの身边にきびしい試練が迫ったのである。

一部の不純分子が、解放直後の複雑な情勢に乗じて李炳輝を親日派ときめつけて病院を差し押さえ、一家全員を自宅に軟禁したのである。

部屋の中には冷気が漂い、訪問客もなかった。

李炳輝はむっつりとして落ち込み、妻は夫の顔色をうかがいながら不安におののいた。

この地に生活の根を下ろして14年、その間万事に慣れ、祖国と変わりなく思ってきた朝鮮。その朝鮮を捨てて日本へ帰らなければならぬのか。それも愛する夫と子どもたちを残して……

彼女は肺腑をえぐられる思いだった。食事も喉を通らず、眠れぬ夜が続いた。

そんなある日、李炳輝は思い切ったように言った。

「仕方がない。つらいけど別れるしかない。2人の息子はぼくが育てる。君は娘を連れて日本に帰りなさい」

血を吐くような夫の言葉に、彼女は茫然自失した。

目の前には夫が用意した背負い袋が置かれてあった。妻が楽に背負っていけるようにと、李炳輝が必要な物を揃えて入れた袋である。

春子は窓の外をぼんやり眺めていた。本当に別れるほかないのなら、いっそのこと玄海灘に身を投げて死んでしまいたかった。

その時、玄関の戸を叩く音がした。

外には見知らぬ人が立っており、金日成将軍が李炳輝医師を呼んでおられると言うのであった。

それは、1946年10月16日のことだった。

李炳輝一家が試練にさらされ、運命の岐路に立っていた時、彼らに再生の道を開いたのは金日成主席であった。

李炳輝を呼びよせた主席は、おのれの過去を恥じて恐縮する彼をなだめ、先生に親日派のレッテルを貼ったのは悪者どもの仕業だ、誰がなんと言おうとわれわれを信じなさい、われわれは決して二言を弄しない、先生はわたしを信頼し、わたしは先生を信頼して、手を取り合って働こう、と励ました。そして、今日からわたしたちは同志になろう、これからわたしは先生を李炳輝同志と呼ぶ、先生もわたしを金日成同志と呼びなさい、約束しよう、われわれは旅の一時の道連れではなく永遠の同志となるべきだ、と力をこめて言った。

驚くべき主席の言葉に、李炳輝は感謝の言葉をなんと述べたらよいのか分からなかった。

主席はそんな彼に、われわれは保安幹部訓練大隊部に病院を一つ設けることにした、ついては、その病院の院長に先生が就いてもらいたい、これはわたしの頼みであり、同時に朝鮮革命の要求でもあると言い、副官に用意した軍服を持ってくるよう指示した。

赤い筋の入った紺の乗馬ズボンと少佐の肩章が付いた上着、軍帽を受け取った李炳輝は、顔を両手でおおい、一層激しく嗚咽した。

泣くのはよしなさい、と主席が何度もなだめたが、李炳輝は泣き続けた。泣いてばかりいると話したいことも話せないと言う主席の言葉に、李炳輝は嗚咽を抑え、震え声で「将軍、このように将軍の過分な信頼にあずかってみると、自分の過去がいっそう恥

ずかしくなります。わたしの妻は日本人です。祖国も解放されたのですから、妻を日本に帰します」ととぎれとぎれに言った。

主席は顔をくもらせ、そのことはわたしも知っている、子どもたちが3人もいるというのに夫人を日本に帰すとはなんということか、とたしなめた。

「先生は今、夫人が日本人だということで心を悩ませ、彼女を帰国させようとしているようですが、それについては考え直して見るべきだと思います。

先生が夫人を帰国させようとしているのは日本人居留民に対するわが人民政権の施策をよく知らず、また夫人の意向を十分考慮せずに決めたことだと思います。

われわれ共産主義者は日本帝国主義者に反対するのであって、決して日本人民に反対するものではありません。われわれは日本人居留民に対し、本人の意思にしたがって、帰国を希望する人には帰国を保障し、わが国への残留を希望する人には永住権を与え、差別するようなことはしないでしょ

主席はとめどなく涙を流す李炳輝に慈愛にみちたまなざしを向けた。

「わたしはすでに、先生の夫人が日本の女性だということを知っていました。彼女は日本の極貧家庭に生まれ、早くに親を失い、生活に困って朝鮮に渡ってきた不幸な女性です。それにもかかわらず、今となって彼女と別れ、子どもたちまで母親と生き別れにさせてよいものでしょうか。夫人が先生と別れることを望まず、子どもたちとも別れたくないから帰国しないと言うなら、本人の

願い通り、わが国と一緒に暮らすのがよいでしょう。国籍が違うという一つの理由で、幸せな家庭を破壊するのは、人倫・道徳の面からも正しいことだとは言えません」

主席は彼の手をやさしく撫でながら、言葉が続けた。

「わたしは先生を信ずるからには、夫人も信じます。先生は夫人が日本人だからといって、少しも萎縮することはありません。先生が日本人女性と暮らしていると非難したり、迫害しようとする者がいれば、われわれが責任を持って、そうさせないようにします。先生は解放直後、一部の偏狭な人たちによって『親日派』のレッテルを貼られて病院を差し押さえられ、家に軟禁させられるなど、ずいぶん悩んだそうですが、今後はそのようなことはないでしょう。

われわれは先生の過去の生活を疑ったり問題視したりせず、民族の良心と愛国心を非常に尊ぶものです。今日から先生はわたしを信頼し、わたしは先生を信頼して、手を取り合って働きましょう。われわれは一時的な道連れではなく、永遠の同行者となるべきです。先生は常にわが党と人民政権だけを信頼し、希望と楽天的な気分を持って力強く生きていかなければなりません」

主席は、先生の入隊を祝って記念写真を取ろうと言い、かたわらの将校に院長同志の着替えを手伝うようにと言った。

主席は、李炳輝を居合わせた抗日闘士たちに紹介し、今日は天気がよいから外で撮ろうと言って、写真屋に、われわれがいつまでも記念できるように写真を上手に撮るようにと念を押した。

夢にも考えなかった大きな光栄に浴して帰宅した李炳輝は、妻

の手をつかみ、全身をわななかせた。大粒の涙がその手の上に落ちた。

その後、金日成主席は、西本春子の願いを容れて彼女の朝鮮籍取得を手配した。彼女は、1948年、朝鮮の公民証を交付され、その時、夫の姓を名乗って李^リ春^{チュン}姫^ヒと改名した。

彼女が朝鮮の言葉や文字もよく知らないことを知って、金正淑^{キムジョンスク}女史は、彼女が抗日闘士の夫人たちと一緒に女性同盟生活をするようはからうとともに、彼女に朝鮮の言葉と文字を教えるよう女性同盟員たちに任務を与え、上達が速いという報告を受けてとても喜んだ。

金日成主席は李炳輝に重要な任務を与えた後も、引き続き医術を磨くよう励まし、祝日や国家的に意義の深い日には宴会に招いた。また、彼の功績を高く評価して折あるごとに勲章やメダルを授与するようはからい、彼が一生を立派に生きていくよう政治的生命の保護者となった。

このように、金日成主席のあたたかい配慮のもと、日本人女性李春姫は大きな希望と美しい夢を抱いて幸福な一生を送った。

5. 日本共産党に送られたメッセージ

祖国解放戦争（朝鮮戦争）が苛烈をきわめていた1950年8月30日、平壤では朝鮮労働党中央委員会政治委員会が開かれた。

金日成主席はここで、日本の反動政府を厳しく断罪した。

「以前から、朝鮮を侵略するためのアメリカ帝国主義の戦争準備に積極的に協力してきた日本の反動政府は、朝鮮戦争が勃発するやいなや戦争参与の問題を国策として打ち出し、侵略戦争に直接荷担する道に入りました」

朝鮮戦争勃発前夜の日本の国内は騒然としていた。

1950年5月から6月にかけて日本占領米軍総司令部は、日本のすべての労組に対して集団行進、集会、デモなど一切の民主的行動を禁止し、6月6日には、マッカーサーの指令で日本共産党の中央委員全員が公職から追放され、翌7日には、新聞綱領に反するとして日本共産党の機関紙『アカハタ』の編集者全員が同じく公職追放され、6月16日には、国内におけるあらゆる集会とデモが無期限禁止された。こうした状況下で、吉田首相は内閣の大改造を断行した。

6月18日、ジョンソン米国防長官とブラッドリー米統合参謀本部議長がフィリピンのマニラから東京の羽田空港に飛来し、21日には、南朝鮮に足を踏み入っていた米國務長官顧問ダレスが日本に到着し、この3人とマッカーサーは東京で4者密談を行った。

その数日前の6月17日、米本土から東京に現れたダレスは1時間半ほど休息しただけで、すぐ空路ソウルへ向かった。翌6月18日、38度線一帯を視察し、ここで「国軍」兵士たちを前にして「諸君が自分たちの気概を示すべき時はそう遠くない。共産主義者は結局、北朝鮮における支配を失うことになるだろう」（ソウル発UP電、1950年6月19日）と述べて彼らを「激励」したダレスは、翌19日、「韓国」国会で、「アメリカは、共産主義と戦う韓国に必要なあらゆる精神的・物質的援助を与える用意がある。諸君は孤立していない。決して孤立しないだろう」とアジった。

そして、ソウルを発つ20日には、李承晩^{リスンマン}に手紙を送り、「わたしは、まさに幕が上がろうとしているドラマにおいて貴国が果たせる決定的な役割に非常な重要性を付与している」とし、同日、外務部長官林炳稷^{リムピョンジク}に送った手紙でも「わたしは、われわれが当面の困難な問題、すなわち勇気と大胆さをもって決定することを必要としている問題について、あなたと李承晩大統領と協議できる機会を得たことをこのうえなくうれしく思っている」と言明した。

東京に戻ったダレスは、6月22日朝鮮の情勢について質問した保守派国会議員たちに「2、3日待ちなさい」と答えた。それから2、3日後と言ったのは開戦の日6月25日を念頭においてのことだった。

アメリカ外交機密文書「ダレス国務長官顧問がニッツ政策企画委員長に送ったメモ」（最高機密、1950年7月20日）には、「全面戦争とその勝利者は誰かと言う見地から考えると、ドイツと日本はきわめて重要である」と記されている。

金日成主席は、日本がアメリカに追随して朝鮮戦争に深く介入し、ありとあらゆる策謀を弄していることを正確に判断していたのである。

主席は重々しい口調で語を継いだ。

「日本の吉田反動政府は、朝鮮戦争勃発直後のこの7月初めの閣議で、アメリカ軍の軍需物資輸送を保障し、アメリカ軍に日本の通信網を提供し、軍需物資の生産・修理を保障する問題について討議し、それを積極的に実現する重大な犯罪行為を働いています。

吉田反動政府は、日本の領土をそっくりアメリカ帝国主義侵略軍の軍事戦略基地に供しました。今、日本の領土はアメリカ帝国主義の朝鮮侵略戦争の攻撃基地、補給基地、修理基地として利用されています。わが国の平和な都市と農村を毎日のように爆撃しているアメリカ軍の飛行機はほとんどが日本の基地から飛来しており、前線に増強されているアメリカ帝国主義侵略軍の兵力もほかならぬ日本の基地から投入されています。日本の多くの軍需工場がアメリカ帝国主義の要求に応じて砲弾や地雷など朝鮮侵略戦争に必要な軍需物資を生産しており、日本の車両と船舶がアメリカ軍の軍需物資輸送に集中的に動員されています」

主席は、日本は軍事要員を朝鮮戦争に直接参加させる罪悪行為もためらうことなく働いているとして、こう述べた。

「アメリカ帝国主義の差し金のもとに、すでに李承晩傀儡政府と軍事的に結託していた日本の反動政府は、朝鮮戦争が勃発するやいなや、旧日本軍の将兵で編成した『義勇軍』をアメリカ帝国

主義侵略軍の各部隊に秘密裏に配属させて戦闘に参加させています。また、日本に居住する朝鮮人まで徴集して『義勇軍』を編成しようとして策動しています。諸事実は、日本の反動支配層が朝鮮侵略戦争の直接の負担者であり、アメリカ帝国主義の忠実な雇用者であることを示しています」

主席のこの断定は正確な資料と分析力に基づく結論であった。

主席は語を継いだ。

「日本の反動政府の朝鮮戦争負担策動は内外の諸人民の強い抵抗にあっています。日本の労働者階級をはじめ広範な人民は、日本の領土を朝鮮侵略戦争のためのアメリカ軍の軍事基地に供した反動政府を糾弾するとともに、朝鮮戦争に送る軍需物資の荷積み作業を拒むなど、反動政府の朝鮮戦争負担策動に反対するさまざまな闘争を展開しています。平和を愛する世界の人民は、日本政府の朝鮮戦争負担策動を不法行為であると断罪し、抗議の声を高めています」

平和を愛する世界人民の抗議にあわてた吉田政府は、内外の世論をはずめ、日本の朝鮮戦争負担を合理化すべく、「朝鮮戦争と日本の立場」と題する白書を発表した。

白書は、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略戦争をアジア諸国の「安全」をはかるためのものであると美化し、日本は朝鮮戦争を拱手傍観するわけにはいかないと釈明した。

主席は、この白書は日本の反動支配層が朝鮮戦争の負担者であることを自らさらけ出したものであると断じ、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略戦争を積極的に後押しし、それに直接負担している日

本の反動支配層の策動を暴露、粉碎するための一大キャンペーンを展開すべきであると強調した。

新聞をはじめ出版物と通信・放送を通じて、日本がアメリカ帝国主義の朝鮮侵略戦争に荷担していることは不法かつ犯罪的な策動であるということを暴露すべきであるとして、主席は語を継いだ。

「日本について言えば、半世紀近くもわが国を侵略し、植民地統治を実施しただけでなく、太平洋戦争を挑発してアジア諸国人民に戦争の惨禍をもたらした戦犯国であり、まだその罪科も清算していない戦敗国です」

主席は、一連の国際協約は日本における軍国主義の復活を禁じており、戦後の日本国憲法は国権を発動する戦争と武力行使を永久に放棄し、国の交戦権を認めないとしている、にもかかわらず、日本政府がアメリカ帝国主義の走狗として朝鮮侵略戦争に荷担したのは、国際法の見地からしても、日本国憲法の見地からしても絶対に許すことのできない犯罪行為であると断じた。そして、日本の反動支配層が朝鮮戦争を契機に軍国主義勢力の復活と再武装を促進しようと画策している以上、われわれは日本の支配層のこのような陰險な企図についても一つ残らず暴露し、吉田反動政府に対する内外諸人民の抗議と糾弾の声をさらに高めるようにしなければならないとして、こう強調した。

「今、日本の広範な民主勢力は、アメリカ占領軍当局と吉田反動政府の悪辣な弾圧の中でも、反戦・平和擁護運動を積極的に展開しています。

われわれは、吉田反動政府の朝鮮戦争荷担策動に反対する日本共産党を含む広範な民主勢力の闘争に積極的な支持と連帯を表明すべきです」

主席は、これと関連して、党中央委員会の名で日本共産党にメッセージを送るべきだとして、そこではまず、わが国の目下の軍事・政治情勢について語り、アメリカ帝国主義の侵略策動とその雇用者吉田政府の犯罪行為を暴露するとともに、日本共産党と広範な民主勢力が進めている反戦・平和擁護運動に積極的な支持と連帯を表明すべきであり、今後、わが党と日本共産党との関係を強め、外国の侵略に反対し、民族の独立と民主主義のための共同闘争を強化することと、在日朝鮮人徴集策動に反対する積極的な闘争を展開することを呼びかけるべきだと指摘した。

こうして、日本共産党に送る朝鮮労働党中央委員会のメッセージが発信された。

金日成主席は、苛烈な戦争の日々にも、正義と真理、平和を愛する日本の進歩的人民を固く信じて、共同闘争の強化を呼びかけたのである。

6. 日本人民平和友好使節団を歓迎して

1953年7月27日、祖国解放戦争（朝鮮戦争）は朝鮮の勝利に終わり、平壤の夜空に戦勝を祝う花火が上がった。

勝利を喜んだのは朝鮮人民だけではなかった。世界の進歩的人民と同様、日本にも朝鮮の勝利を喜ぶ多くの人たちがいた。彼らはアメリカ帝国主義の朝鮮侵略戦争に一貫して反対し、侵略軍の殺戮行為を糾弾した。

平和を愛する日本の人士たちは停戦を祝う使節団を組んで平壤を訪れた。

1953年11月9日、金日成主席は国際スターリン賞受賞者であり日本平和擁護委員会委員長である大山郁夫教授を団長とする朝鮮停戦祝賀日本人民平和友好使節団に接見し、次のような演説を行った。

「日本の著名な平和闘士である大山郁夫先生！

わたしは、先生を団長とする朝鮮での停戦を祝う日本人民平和友好使節団のみなさんを熱烈に歓迎し、平和愛好的な日本人民が先生を通してわれわれに寄せた祝賀に対し深い謝意を表するものであります。

朝鮮人民が祖国の自由と独立、平和のために、アメリカ帝国主義武力侵略者と売国奴李承晩^{リ スンマン}一味に反対する3年間の苛烈な祖国解放戦争において輝かしい勝利を勝ち取った今日、日本人民が友

好使節団を派遣して、われわれの勝利を熱烈に祝賀するのは十分理解できることです。今日、日本人民は外国帝国主義占領者と国内の売国的反動支配層に反対してねばり強くたたかっており、その闘争で勝利することが民族の独立と自由、平和を実現する唯一の道であることを十分認識しています。このような意味からみれば今日、朝日両国人民は共通の敵に反対してたたかっていると言えます。

かつて日本帝国主義侵略者は、およそ40年間も朝鮮を占領し、朝鮮人民に対する搾取と抑圧を強めるため、朝日両国人民間に不和の種をまき、民族間の軋轢と敵対関係を極力助長しました。アジア大陸に対する日本帝国主義の侵略政策は、日本人民を含む多くのアジア諸国人民に大きな苦痛と災難をもたらしました。

朝鮮戦争で惨敗を喫したアメリカ帝国主義者は、今日再びアジア人をもってアジア人を制圧すべきであるとの術策を弄しつつ、日本を朝鮮とアジア大陸侵略の道具に仕立てようとしています。

アメリカ帝国主義の使い走りである日本の反動支配層は、アメリカ帝国主義者の指図に従って、かつての日本軍閥の恥ずべき冒険の轍を踏み、軍国主義を復活させ再武装するために狂奔しています。

アメリカ帝国主義のこうした行為は、厚顔無恥なものであり、まったくの誤算であります。

アジアはもはや以前のアジアではなく、朝鮮人民もかつての朝鮮人民ではありません。日本人民もまたそうであります。またアジアでは、世界人口の4分の1を占める中国人民が人民民主主義

の新中国を建て、アジアと太平洋地域における強力な平和擁護勢力に成長しました。

朝鮮人民は、日本帝国主義植民地支配から解放された後、民族独立を守る強力な武器である人民政権を創建し、民主勢力を強化しました。

国の主人となった人民の力がいかに偉大なものであるかは、このたびアメリカ帝国主義者が多くの追随国まで動員し共和国を冒険的に侵略して、惨敗を喫した事実がよく示しています。

アメリカ帝国主義者と日本の反動支配層が日本軍国主義を復活させ、日本を再武装させる行動は、アジアと全世界平和愛好諸国人民の憎悪と糾弾を浴びているばかりか、日本人民の強い反抗にぶつかっています。これは当然なことであります。

今日全世界の平和愛好諸国人民は、アメリカ帝国主義者と日本反動支配層のアジア侵略と世界制覇のための軍事基地化策動に反対する、日本人民の闘争を注視しています。日本人民が世界の平和民主隊列にしっかりと立ち、アメリカ帝国主義占領者を駆逐し、日本の独立と民主化と平和を勝ち取るならば、アジアと世界の平和はさらに強固なものになるでしょう。

朝鮮人民は今日、日本の反動支配層の行動に警戒心を高めつつ、侵略と反動化に反対し、日本の平和と民主的発展をめざして勇敢にたたかっている日本人民に敬意を表しています。

朝鮮人民は、アメリカ帝国主義武力侵略者と売国奴李承晩一味に反対する祖国解放戦争の時期に、平和愛好的な日本人民が反動の過酷な弾圧にひるまず、朝鮮人民の正義の戦いに積極的な支援

を寄せたことをよく知っています。

朝日両国人民の相互理解と国際主義的友好関係は、日本の反動支配層と売国奴李承晩一味のあらゆる陰險な離間策動にもかかわらず、今後さらに強化発展し、それが侵略と戦争に反対し、民族独立と平和を実現するたたかいに寄与するであろうことは疑う余地がありません。

わたしはこの機会に、在日朝鮮同胞の問題について簡単に述べようと思います。

在日朝鮮同胞は、日本反動の虐待と弾圧のなかでも彼らの祖国——朝鮮民主主義人民共和国を擁護し、傀儡李承晩一味に反対して不屈のたたかいを展開しており、祖国解放戦争の時期にはアメリカ帝国主義と売国奴李承晩一味の強制徴兵と追放策動に反対してねばり強くたたかいました。

朝鮮人民は、在日朝鮮同胞の祖国に対する愛国的献身性に深甚の敬意を表しています。

わたしは、在日朝鮮同胞がその正義のたたかいにおいて平和愛好的日本人民との国際主義的連帯を強め、また共和国南半部に対するアメリカ帝国主義者の植民地化政策と反逆者李承晩一味の売国的策動に反対し、祖国の平和的統一と独立を勝ち取るため力強くたたかい、祖国に対して担っている任務を立派に遂行するものと確信します。

使節団のみなさん！

あなたがたが訪朝してじかに見られたように、アメリカ帝国主義武力侵略者の蛮行によって、朝鮮の多くの都市と農村が灰燼に

帰し、産業、運輸、通信および文化施設がことごとく破壊されました。

今日朝鮮人民は、無残に破壊された人民経済を早急に復興建設するための巨大な課題の遂行に奮起しました。

われわれは、この大きな課題をここ2、3年のうちに完遂しうる条件と自信をもっています。

英雄的な朝鮮人民のゆるぎない決意と祖国に捧げる愛国的献身性は、戦後の人民経済復興建設のたたかいに勝利をもたらす確固たる保証であります。われわれにはまた、平和と民主主義・社会主義陣営の強力な国際主義的支援があります。それゆえ、帝国主義武力侵略者との戦いで勝利したように、戦後の人民経済復興建設のたたかいにおいてもわれわれは必ず勝利するであります。

使節団のみなさん！

わたしは、このたびの日本人民平和友好使節団の訪朝が朝日両国人民の友好関係をさらに緊密にするものと確信しつつ、民族の自主権と平和のため、外国占領者とその手先に反対する日本人民の闘争においてさらに大きな成果があるよう望みます」

このように、厳しい戦争の試練の中でも、正義と良心をもつ日本人民に厚い信頼を寄せていた金日成主席は、日本の平和友好使節団といささかも距離を置かず、日本の進歩的人士たちに温かく接したのである。

7. 日本人民平和友好使節団の記者会見

大山郁夫教授を団長とする朝鮮停戦祝賀日本人民平和友好使節団は、金日成主席の接見を受けた2日後の1953年11月11日、平壤で記者会見を行った。

そこには『労働新聞』『民主朝鮮』『朝鮮人民軍新聞』など中央の各新聞と通信社、それにソ連のタス通信、中国の新華社など朝鮮駐在の外国の通信社や新聞の記者が詰めかけていた。

以下はその質疑応答である。

問 訪朝の感想を話してほしい。

答 われわれは朝鮮に到着後数日しか経っていないが多くのものを見た。

われわれは至る所で、すぐる戦争期間アメリカ侵略者が働いた極悪な野獣性と悪辣さを目にし、破壊・略奪行為の惨酷な痕跡を目撃し、平和を愛する朝鮮人民に加えられた野蛮な行為に対し耐えがたい憤激と憎悪を覚えた。同時に、このような苛酷な戦火にさらされながらも屈することなく英雄的なたたかいを展開して、栄えある勝利を勝ち取った朝鮮人民の勇敢なたたかいと忍耐力に尊敬と感嘆を禁じえないでいる。

今日、戦争の惨禍から立ち直るべく廢墟の中から力強く立ち上がっている朝鮮人民の気高い姿は、自由と民族の独立をめざして

たたかっているわれわれ日本人民を限りなく鼓舞激励している。

われわれが朝鮮に来て覚えた感銘は数え切れぬほど多い。なかでもとりわけ忘れがたい感激を覚えたのは、朝鮮人民の敬愛する金日成元帥がわれわれにお会いになって日本人民に送るお言葉を下さったことだ。これはただわが使節団一行の光栄であるばかりでなく、全日本人民の光栄である。われわれは金日成元帥の日本人民へのメッセージを必ず正確に伝え、彼らが自由独立をめざすたたかいで新たな勇気と自信を抱くよう最善の努力を傾けるであろう。

問 米英帝国主義侵略者に抗する朝鮮人民のたたかいを日本人民はどうとらえているのだろうか。

答 すぐる3年間に及ぶ苛酷な戦いで朝鮮人民がアメリカ帝国主義侵略者に抗して英雄的にたたかい、敵に停戦条約に調印せざるを得なくした輝かしい勝利を勝ち取ったことに、全日本人民は限りない鼓舞と激励を覚えている。

特に、アメリカ帝国主義侵略者の日本再武装政策と植民地化政策に反対してたたかっている日本人民は、共通の敵に反対するたたかいで、朝鮮人民が収めた偉大な勝利を、自分たちの勝利として喜んでいる。

朝鮮人民が自国の自由と独立を守るために進めた祖国解放戦争は、侵略者に抗する人民の正当なたたかいであり、正義と真理を守った聖なるたたかいであった。それゆえ、偉大なソ連をはじめとする国際民主陣営は、朝鮮人民のたたかいを声援し、中国人民は血潮をもって朝鮮人民を援助した。われわれ日本人民も朝鮮人

民のたたかひの正しさを深く理解して朝鮮人民のたたかひを支持し、日本の軍事基地化反対、日本軍の朝鮮戦線参戦反対、朝鮮への軍需物資輸送反対などのねばり強いたたかひを続けた。

朝鮮人民が今日の栄えある勝利を勝ち取ったのは、国際民主陣営の心こもる援助にもよるが、その根本的要因はあくまでも朝鮮人民の勇敢なたたかひと忍耐力、祖国への崇高な献身性にに基づくものだということを、われわれ日本人民はよく知っている。

問 朝鮮の停戦を破綻させようとするアメリカの策動を日本人民はどのように見ているのだろうか。

答 朝鮮における停戦の実現は、国際緊張状態を緩和するうえで大きな貢献となる。

それゆえ、日本人民は朝鮮の停戦を大いに歓迎しており、停戦協定の正確な実践を保障し、ひいては政治会談を成功させて朝鮮問題の平和的解決を達成するよう強く主張している。

日本人民が朝鮮の停戦実現をどんなに歓迎しているかは、停戦協定調印のニュースに接した直後日本全国350カ所で朝鮮の停戦を祝う広範な人民の集会が開催されたという一事をもってしても十分にうなずけるであろう。まさにそれゆえに、日本人民は朝鮮の停戦協定を破綻させようと血眼になっているアメリカ侵略者の奸悪な企みに対し憤激と憎悪を禁じえないのである。

朝鮮停戦協定の破綻を企むアメリカ帝国主義者の謀略は、あくまでも侵略者の凶悪な野望の表れであり、朝鮮で新たな戦争を挑発し、朝鮮問題の平和的解決を妨げるための策略である。

万一アメリカ帝国主義侵略者が朝鮮の停戦をあくまでも破綻さ

せるために狂奔するならば、彼らは全世界平和愛好人民から永久に侵略者の烙印を押されるであろうし、彼らの謀略は恥ずべき敗北を免れないであろう。

問 「韓日会談」と吉田政府の在日朝鮮人弾圧政策を日本人民はどのように受けとめているのであろうか。

答 「韓日会談」は全く日本人民の要求ではない。日本人民は「韓日会談」の裏でアメリカ帝国主義侵略者の陰謀が蠢動していることをはっきり見抜いている。

アメリカ帝国主義は、李承晩と吉田反動一味の「韓日会談」の妥結をはかることによって日本再武装の合法性をでっち上げるとともに、60万在日朝鮮人を李承晩一味に売り渡そうと策動している。

そのため、日本人民は「韓日会談」を「サンフランシスコ単独講和会議」と同じ一場の演劇と見なしており、これに反対して強くたたかっている。

吉田政府が「韓日会談」を通して南朝鮮にある日本の財産権を主張しているのは、あたかも盗人がその盗品の所有権を主張するような笑止なことである。日本人民はこのような主張に対して蔑視と憎悪を示している。

日本人民は「韓国」というものをてんから認めていない。今日「韓日会談」がそんなにも醜い泥仕合の末に破綻したのは至極当然であろう。

在日朝鮮人に対する吉田政府の弾圧について言うならば、日本のすべての人民は日本の反動支配層のこの不法な行為に一致して

抗議している。

日本人民は、自国の民族的独立と自由をめざすたたかいで在日朝鮮人との緊密な提携が緊要であることを現実的な問題として理解している。

それゆえ日本人民は、アメリカ帝国主義者の日本再武装政策と植民地化政策に反対するたたかいと、吉田政府の在日朝鮮人弾圧に反対するたたかいを密接に結びつけている。

在日朝鮮人の95.8%がその勇敢なたたかいによって朝鮮民主主義人民共和国の光栄ある公民の資格をたたかいとった。

在日朝鮮人民は、吉田政府の弾圧とアメリカ帝国主義の日本植民地化政策に反対してたたかっている。

問 アメリカの南朝鮮占領政策と日本の再武装に反対する日本人民の最近の闘争状況はどのようなものであろうか。

答 日本の再武装に反対する日本人民のたたかいは、軍事基地化に反対するたたかいとつながっている。

日本人民は、アメリカ帝国主義者が打ち出した「アジア人によるアジアの防衛」という凶悪なスローガンに対抗して「アジア人同士のたたかいはやめよう」という闘争スローガンを掲げ、アメリカ帝国主義の日本植民地化及び再武装政策に反対する全人民的運動を繰り広げている。

このたたかいで、日本の労働者階級は日本の軍需産業を平和産業に切り替えることを要求しストライキをもってたたかっており、学生たちは新徴兵制度に反対し、農民は彼らの耕作地を米軍の基地にされることに反対し、女性たちは米兵の人権蹂躪に反対し、

父母たちは子女教育の権利剥奪に反対して各自ねばり強いたたかいを繰り広げている。

今日、日本の全国各地には770余もの米軍基地が設けられている。

このような状況のもとで日本人民は、アメリカの統治者が日本人民に約束した「独立」と「自由」が欺瞞であり虚偽であったことをいっそう明確に認識するようになった。

今日日本人民は、人民生活全般の向上を実現するために、これを妨げる吉田政府を打倒し、アメリカ帝国主義侵略軍の撤退にたたかいの矛先を向けている。

問 日本人民の平和擁護闘争の現状はどのようなものだろうか。

答 わが国における平和擁護運動は1949年以来国際平和擁護運動と緊密につながっている。日本人民の平和擁護のたたかいは朝鮮戦争の勃発後、一段と強化された。それは、朝鮮人民が自国の独立と自由、ひいてはアジアと世界の平和のために血を流してたたかっている事実から非常な鼓舞と激励と信念を得ているからである。

とりわけ去る6月、ブダペストで開かれた世界平和理事会の諸決定の発表後、日本人民は「国際問題の平和的解決」というスローガンを掲げていっそう広範なたたかいを展開している。

朝鮮における停戦は、国際紛争問題を平和的に解決するたたかいで勝ち取った大きな勝利の一つである。

日本人民は日本平和擁護委員会に固く結集し、平和と民主主義と自国の民族的独立をめざすたたかいを広範な人民の統一戦線に基づきさらに強力に展開しており、国際問題の平和的解決を望ま

ぬ者たちが、協議と会談の方法で国際紛争を解決することに同意せざるをえなくなるまで、全世界の平和愛好人民と固く団結して自らのたたかいを前進させる決意を固めている。

この日の記者会見で大きな感動を受けた内外の記者たちは、正義と良心の叫びを上げた使節団の声を全世界に競って伝えた。

8. 日本人民にわたしの挨拶を

朝鮮戦争後、日米安保条約を締結することによって日本政府は、多数の軍事基地を米軍に提供し、自らも核武装の道をひそかに歩み始めた。

安保条約に反対する日本人民のたたかいは激烈に展開され、そのなかで朝鮮との関係改善を求める声も高まっていた。

そうした動きを反映して、朝鮮の戦後復興建設が本格化していた当時、少なからぬ日本の進歩的人士が平壤を訪れた。

朝鮮対外文化連絡協会と朝鮮記者同盟全国委員会の招請で、1956年の晩秋平壤を訪れた『読売新聞』記者秋本秀雄氏もその一人であった。

氏は、平壤に到着すると、金日成主席との会見を要請し、その間朝鮮の復興建設の様子をレンズに収めた。

1956年11月21日、金日成主席は秋本秀雄氏と会見し、その質問に懇切に答えた。

問 朝鮮民主主義人民共和国と日本との国交問題についてどうお考えになりますか。

答 朝鮮民主主義人民共和国政府は、平和共存の原則に基づいて日本と正常な関係を結ぼうという立場を繰り返し表明しました。

こうした共和国政府の希望にもかかわらず、日本政府はいまな

おもっとも近い隣邦であるわが国と正常な関係を樹立していません。これは日本人民の念願と全般的な世界平和の利益にそむく非正常な状態であります。日本側が朝鮮民主主義人民共和国と日本との関係正常化のために誠意を示すならば、われわれはいつでもこの問題について話し合う用意があります。

朝鮮民主主義人民共和国と日本との関係正常化が早ければ早いほど、それは両国人民の利益となり、極東の恒久平和に有益でありましょう。

問 朝鮮民主主義人民共和国と日本との経済・文化交流に関してどうお考えになりますか。

答 われわれは現在、平和的な建設と生産に全力を注いでいます。ここで隣邦との経済・文化交流と協力は重要な意義をもちます。

日本人民が産業と科学・技術分野で収めたすぐれた成果は、わが国の経済建設にとって少なからぬ助けとなり、また朝鮮人民が解放後の10余年間に経済・文化分野で収めた大きな成果は、日本人民の経済・文化発展の助けになるものと思います。

朝鮮民主主義人民共和国と日本両国間の経済・文化交流は、国交が正常化すればより有効に実現されるでしょう。しかしわれわれは、それ以前にも両国の経済・文化交流が可能だと認め、その実現のために努力を続けています。

近年日本から多くの実業家、社会活動家、文化人が訪朝しましたが、彼らとの経済・文化交流問題についての話し合いでは常に双方が完全な合意に達しました。経済・文化交流を続ければ、国

交の正常化が促進されることは疑いの余地がありません。

両国の経済・文化交流においては、経済および技術使節団の交換と科学・文化界人士の集団的または個別的な相互訪問を実現し、貿易を促進するため商品見本市などを相互に開催する必要があると考えます。

………

問 朝日国交正常化問題を中日国交正常化問題と同時に推進することを日本人民は希望していますが、これをどうお考えになりますか。

答 朝日国交正常化問題が中日国交正常化問題と同時に進められるのは、もちろんよいことです。また朝日間の国交正常化問題が中日間のそれより先に推進されるのもよいことだと思います。

問 朝鮮民主主義人民共和国と日本の国交正常化問題について日本政府にどんなことを要求されますか。

答 わたしは、両国の国交正常化問題についてこれまでわれわれが表明した立場と要求を、日本政府が勇気と誠意をもって受け入れることが必要だと考えます。

問 日本の業者が朝鮮の北部東海岸地域に来て通商することを希望していますが、「李承晩ライン」がそれを妨げている実情に照らして、朝鮮民主主義人民共和国政府が北部東海岸地域に来る日本の船舶を保護できないでしょうか。

答 日本の商船がわが国の領海に入ってくれば、われわれはそれを保護するでありましょう。それはわれわれの当然の道義だと思います。

しかし、あなたもご存知のようにわが国は今停戦状態にあり、朝鮮の東西の海上では反逆者李承晩一味の海賊行為が続いています。このためにわれわれの望まぬ不慮の事件が起こらないとは断言できません。

「李承晩ライン」について言うならば、それは李承晩一味が一方的に設定したものでわれわれとはなんの関係もありません。

………

問 在日朝鮮人問題に関してどのような意見をお持ちでしょうか。

答 在日朝鮮人はわが国の海外公民です。したがって、共和国政府は彼らの問題に深い関心を払っています。

われわれは、なによりも在日朝鮮人に生活権が保障されなければならないと考えています。日本政府は、在日朝鮮公民が安定した生活ができるよう職業と職場を斡旋し、帰国の権利をはじめあらゆる民主的自由と権利を保障すべきであります。

一方、在日朝鮮人は日本で暮らしている以上、当然日本の法律を守らなければなりません。

われわれは、日本政府が在日朝鮮人の生活を保障し、帰国希望者が早急に祖国へ帰れるよう誠意ある努力をつくすことを期待します。

日本政府が、祖国、朝鮮民主主義人民共和国への帰国を望む在日朝鮮人の帰国の便をはかって一定の港を指定するならば、共和国政府は帰国希望者のために船をさし向けるであります。

問 われわれ両国間の友好促進のために、首相閣下が日本人民

にメッセージを送って頂けないでしょうか。

答 わたしは、民族独立と国の民主的発展と平和のために、そして朝鮮民主主義人民共和国と日本の関係正常化のためにたたかっている日本人民に熱烈な祝賀の挨拶と声援を送るものです。

わたしは、日本人民が朝鮮人民をはじめ世界平和愛好諸国人民の支援のもとに、その正義のたたかいで必ず輝かしい成果を収めるものと確信します。

わたしは、あなたが『読売新聞』を通じて日本人民にわたしの挨拶を伝えてくれるよう望みます。

氏は、翌22日、訪問日程を終えて帰国の途に就いた。

2週間にわたる滞在期間に、平壤、開城、ケソン清津、チヨンジン平南灌漑など各地を参観して受けた印象は大きかった。

なかでも、日本人民にわたしの挨拶を伝えてほしいと言った主席の言葉は貴重であった。

当時、日本の支配層が軍国主義の復活を企てるなかで、在日朝鮮人に迫害を加え、帰国実現を妨げるなど朝日関係を悪化させていたことから、朝鮮人民の対日感情はよくなかった。そんな時に金日成主席との会見が実現し、とりわけ、日本人民に自分の挨拶を伝えてほしいとの依頼を受けたのであるから、氏の喜びは大きかった。

9. 祖国に帰るのは当然の権利

1959年元旦、金日成主席は新年の祝賀宴で演説を行った。

主席は、前年の社会主義建設における成果を誇り高く総括し、新年の課題について言及した後、在日同胞の帰国実現問題に触れて次のように述べた。

「在日朝鮮同胞は祖国への帰国実現の一念に燃えて闘争を続けていますが、日本政府の非人道的な迫害と妨害策動によっていまなお帰国が実現せず、異国の困難な状況下で新年を迎えています」

なんぴとも、またいかなる力も、生きる道を求めて祖国への帰国を希望する彼らの正当な権利と人道的要求を阻むことはできないとして、主席は語を継いだ。

「わたしは、日本で苦勞しているすべての在日朝鮮同胞に新年の祝賀を送り、帰国を希望する彼らの念願が早急に実現することを期待します」

帰国を妨げられ日本で苦勞している在日全同胞の帰国を必ずや実現させなければならないとする主席の言葉は在日朝鮮人を大きく励ました。

長崎県大村収容所に抑留されている同胞たちは、1959年の新年を迎えて、夢にも忘れられない祖国に挨拶を送る、という手紙を朝鮮へ送った。

その手紙で彼らは、岸政府の非人道的かつ不当な措置によって

大村収容所に抑留され、虐待と蔑視を受けている悲惨な境遇を訴えた。自分たちが生まれた祖国に帰れない胸の痛みを切々と吐露した手紙は、朝鮮民族の悲劇の歴史を反映するものであった。

人道的原則と国際法に反する岸政府の非道な仕打ちに全朝鮮人民が怒り、正義を愛する世界の人民も糾弾の声を上げた。

1959年1月1日付け『人民日報』は、在日朝鮮人の帰国問題に関する朝鮮外務省の声明を支持して、「在日朝鮮人の帰国を妨害する岸政府を糾弾する」と題する論説を掲載し、藤山外相が在日朝鮮人の帰国問題は「韓日会談」で政治的に解決されるべきだと公言したことを糾弾するとともに、岸政府は警察を駆り立てて帰国を希望する在日朝鮮人を威嚇していると暴露した。同じ頃、ソ連のモスクワ放送も岸政府の非人道的行為を鋭く批判した。

岸政府の非道な言動は日本国内でも大きく非難された。大多数の日本人は在日朝鮮人の境遇に同情し、彼らの帰国要求運動を積極的に支持した。

こうした状況の中、日朝協会理事長畑中政春氏が平壤を訪れた。

1959年1月10日、金日成主席は多忙ななかでも畑中氏と会見した。

主席は、畑中氏が世界の平和に尽力していることを高く評価し、あわせて朝鮮人民と日本人民の親善強化に努めてきたことに謝意を表した後、次のように述べた。

「今、あなたのような多くの平和愛好の人士が活躍しているのは非常によいことです。わたしは、あなたのような平和愛好の人士の隊列が拡大されることを望むものです。

朝日両国人民は、相互に往来し親善をはかるべきです。日本はわが国の隣邦です。朝日両国人民は隣同士の間柄ですから睦まじく暮らし、反目などしてはなりません。過去に朝鮮人民が反対したのは日本帝国主義者であって、日本人民ではありません。今も朝鮮人民は、日本軍国主義者は敵と見なしますが、日本人民を敵視していません」

主席は、これまで日朝協会は朝日両国間の国交正常化のために多大の努力を重ねてきたと再度高く評価した。

畑中氏は恐縮し、日朝間に国交が樹立されていないことを申し訳なく思うと述べた。

主席は、気を使うことはない、両国間の国交問題は時機が到来すれば解決されるだろう、日本政府がわが国に対して非友好的態度をとっている現状では両国間の国交樹立は不可能であり、またこうした状況のもとで国交が樹立されたとしてもそれは無意味だとして、こう続けた。

「朝鮮と日本との国交樹立は急を要する問題ではありません。重要なのは両国人民間の親善関係を発展させることです。

国交があれば人民間の親善関係が結ばれ、それがなければ親善関係が結ばれないというものではありません。もちろん、国交も樹立され、人民間の親善関係も深まれば、それに越したことはありません。しかし、国交がなくても人民間の親善をはかることができます。今後、国交関係のいかんにかかわらず、朝日両国人民は相互に往来し、文化も交流すべきです。日朝協会がこのための努力を続けるよう望みます。

平和を守るための朝鮮人民と日本人民の闘争は密接なつながりをもっています。したがって両国人民は、平和のための闘争において支持し合い、連帯すべきです」

主席は、日本軍国主義の復活はアジア全般の平和と安全にとって脅威となるだけに、朝鮮人民は日本軍国主義の復活に反対する日本人民の闘争を積極的に支持する、また、「日米安全保障条約」の改悪に反対する日本人民のたたかいを極力支持する、今後、「日米安全保障条約」の改悪と日本軍国主義の復活に反対する日本人民のたたかいがさらに盛り上がるものと確信する、と言った。

主席の話しぶりは、同じ朝鮮人を相手にしているような親しみのこもったものであった。

主席は、国内外の情勢についても平明に語った。

朝日両国間の貿易問題については、朝鮮と日本は距離も近いので必要な商品を交易することは両国人民にとって有益だろうとし、また、「韓日会談」は侵略者と売国者間の密談であり、アメリカ帝国主義者が日本と李承晩、蒋介石のような傀儡を集めて「3国軍事同盟」をつくりあげようとするのは、アジア人同士を戦わせてアジア侵略の野望をたやすく実現し、さらには社会主義諸国に対する侵略の野望を実現しようとするものだと言った。

最後に主席は、在日同胞の帰国問題に言及した。

「在日朝鮮同胞が祖国に帰るためにたたかうのは、まったく正当なことであります。また日朝協会をはじめ日本の各社会団体と各階層人民が、在日朝鮮同胞の帰国運動を支援しているのも当然なことだと思います。

わたしはまず、帰国実現をめざす在日朝鮮同胞のたたかいを支援している日朝協会をはじめ、日本の各社会団体と各階層の人民に謝意を表し、あなたが帰国してわれわれのあいさつを伝えてくれるよう望みます」

主席の言葉の端々から熱い民族愛、同胞愛を感じとり、畑中氏は深い感動を覚えた。

「朝鮮人民は単一民族として強い民族愛をもっています。朝鮮人民が日本帝国主義者に国を奪われたときは、民族が離散してもやむをえなかったのですが、政権を握った今日、同胞が海外で民族的な蔑視と迫害を受けているのを座視することはできません。現在、日本に在住する朝鮮人の生活は困窮状態にあります。日本政府は在日同胞が朝鮮民族だということで、彼らになんらの生活条件も保障していません。われわれは、国内人民の生活が向上すればするほど、同胞が海外で苦勞していることにいっそう心を痛めており、たとえ一膳の食を分け合うようなことがあっても、彼らが一日も早く帰国することを望んでいます」

聞く人の胸を打たずにはおかない真情のこもった言葉であった。

「われわれは在日同胞のみならず、南朝鮮で苦痛にあえぐ兄弟たちをも、傍観してはいません。現在、南朝鮮には400余万の失業者と数十万の孤児がいます。最近共和国内閣では、南朝鮮の失業者と孤児に救済物資を送り、寄るべのない孤児をすべて引きとって養育する決定を採択し、それを南朝鮮傀儡政府に通達しました。しかし、彼らはこれに対してなんらの回答もよこしていません。

われわれは同胞愛に基づいて、在日同胞を共和国に帰国させる

よう日本政府に要求しました。しかし日本政府はまだこれに応じていません。現在、朝日両国間に国交はありませんが、日本政府が朝鮮人を祖国へ帰すのに、難点はないと思います。日本政府は在日朝鮮同胞を祖国に帰すべき責任を負っています」

日本政府の迫害を受けている在日同胞の姿を思い浮かべるかのようにしみじみとした口調で語る主席の言葉に、畑中氏は胸がしめつけられる思いがした。

主席は、在日朝鮮同胞が祖国に帰るのは誰も奪うことのできない彼らの当然の民族的権利である、したがって日本政府は早急に在日同胞を祖国に帰さなければならないとし、われわれは帰国を希望する在日同胞をすべて受け入れる準備ができていると言った。

「住宅建設も進んでいるので、帰国する同胞に住宅条件を十分に保障することができます。先生もごらんになったと思いますが、農村が復興して人民の食糧問題が完全に解決し、工場も復興して消費物資に対する人民の需要を基本的に満たせるようになりました。したがって、数十万の在日同胞が帰国しても、国が彼らの生活を保障できない状態ではありません。

就業問題も心配ありません。現在、わが国の工場と農村では労働力の不足に悩んでいます。在日同胞が帰国したら、すべての人に能力と体質に合う適切な職場を保障するであります。

子女の就学も問題ありません。わが国ではすでに全般的中等義務教育制が実施され、すべての新しい世代が無料で中等義務教育を受けています。われわれは学校を増設しなくても、在日同胞の子女数十万を受け入れて就学させることができます。

一言で言って、在日同胞が帰国して安定した職業を得て幸福な新しい生活を享受し、子女を学校に入れられるよう、すべての条件を保障する準備ができています。したがってわれわれには、在日同胞の帰国にあたって少しも問題になることはありません」

主席は、在日朝鮮同胞の帰国実現問題は日本政府の誠意いかににかかっている、日本政府が人道的立場に立って在日朝鮮同胞を祖国に帰すために努力するならば、彼らの帰国問題は容易に解決されるだろう、と重ねて強調した。

そして、日本政府は在日朝鮮同胞の帰国を認めるだけでなく、彼らが安全に帰国できるよう必要な措置を講じるべきである、帰国する在日同胞の安全について日本の領海では日本政府が責任をとり、共和国の領海に入ってからには共和国政府が責任を負うべきであると述べた。

主席は、われわれは日本に在住する朝鮮同胞が祖国に自由に往来できるようになるべきだと考えている、現在、日本政府は在日朝鮮同胞の祖国への自由往来を許可していないが、これも朝鮮民族を敵視する態度だ、と語気を強めた。

在日朝鮮同胞の帰国を実現させるためには日本人民の支持が重要だとして、主席は、日本人民は彼らの帰国運動を極力支持、共鳴し、その帰国を実現させるべきだと言った。

熱心に耳を傾けている畑中氏に親しみのこもる眼差しを向けた主席は、こう言葉を継いだ。

「朝鮮人民は先生に大きな期待をかけています。わたしは先生が在日同胞の帰国実現のため引き続き努力されるよう望みます。

先生は人民のために努力しています。人民のために働く人は人民から評価されます。先生が人民のためにさらに奮闘するよう望みます。

……

わたしは、日本にあなたのような、われわれの支持者を多くもっていることをたいへんうれしく思っています。わたしがあなたと談話を交わしているのは、日本人民と対話しているのも同然です。われわれは日本に行けませんが、あなたはいつでもわが国を訪問できます。われわれは先生がしばしばわが国を訪ねるよう希望し、わが国人民とあなたとの関係がさらに密接になることを望みます。

あなたはわが国の社会主義建設が成功裏に進むことを願ってくれましたが、われわれは祖国の平和的統一と社会主義建設を早めることによって、あなたの念願にこたえるであります」

主席との会談後、畑中政春氏は記者会見にのぞんだ。

「岸政府の不当な措置は、広範な日本人民の反対にあい、糾弾を受けているだけでなく、岸が所属している自民党内でも反対を招いている。

朝鮮人民との友好関係を一段と発展させるという日本人民の願いは日ごとに高まっている。日本人民は、朝鮮民主主義人民共和国に対し非友好的な態度をとり、在日朝鮮公民の帰国実現を妨害する岸政府の不当かつ非人道的な措置を排撃しており、在日朝鮮公民の帰国運動を極力支持し、現在、その実現に向けてあらゆる方法を講じて協力運動を力強く展開している」

氏は、帰国すれば、日朝協会理事長として在日朝鮮公民の帰国実現のために積極的にたたかう決心であるとして、日本の世論をさらに喚起し、在日朝鮮公民の帰国実現に協力する大衆運動を展開するとともに、国会でもこの運動を積極化し、在日朝鮮公民の帰国の念願を一日も早く実現するために尽力すると力をこめて語った。

10. チョンリマ時代とともに

朝鮮はチョンリマ（千里馬）時代という誇らしい歴史的段階を経ていた。当時、朝鮮人民と歴史の体験を共にした日本人は少なくない。

1962年6月29日の『労働新聞』には、訪朝した『電波ニュース社』社長柳沢安夫氏の次のような記事が掲載されている。

「労働党時代は朝鮮人民の歴史でかつてなかった開花期である。わたしはこのたび2回目に平壤を訪問することになった。

チョンリマはばたく平壤は、全くその面貌を一新している。

朝鮮中央放送委員会幹部たちの出迎えを受けて降りたった飛行場は、2年前の飛行場ではなかった。

平壤へ延びた道路は緑したたる街路樹が整然と並ぶ立派なものであった。

平壤市に入ると天を衝く勢いで天がけるようなチョンリマの銅像がそびえていた。

チョンリマの勢いで進軍する平壤の大きな流れにつつまれたわたしは、興奮を抑えきれなかった。

雄壮で優雅な平壤大劇場の赤い屋根瓦はいまにも飛び立つかのようないでたちであり、青く澄んだ大同江畔の遊歩道には、しだれ柳やさまざまな花が咲きみだれる花壇の間をぬって人びとが散歩し、公園のベンチには学生たちの読書姿が見られる。

市内には高層ビルが林立し、5～6階の建物が大道路も狭しと見下ろしており、10階建ての建物もここではさほど高く思われなかった。

道行く人たちの服装は清潔で華やかであった。

ここにも彼らの高尚で洗練された文化水準が見て取れる。

どこにも2年前に比べ大いに発展した平壤の姿が見られる。

躍進する平壤の見学は工業・農業展览馆から始まった。

わたしは各館を巡りながら驚きと喜びを隠せなかった。

大型トラクター、エクスカベーター、電動機、その他の大型機械が大量生産されているのだ。

5カ年計画から7カ年計画へ……朝鮮民主主義人民共和国は先進的な発達した工業国に変わりつつあった。

農業でも大きな発展が遂げられている。

1962年に500万トンの穀物を収穫したということは、朝鮮の農業が急速に発展していることを物語っている。

この国では、工業と農業が渾然一体をなしているのである。

わたしは展览馆で展示品だけを見学したのではなかった。わたしのそばで見学している朝鮮の同志たちの姿を注意深く見つめた。立派な機械や農産物の前で彼らは、自分たちの力を感得しているのであった。

自分たちの創造力が生んだ財貨の前でよりいっそう確信を深めるのであった。

——われわれは何でも成し遂げる力をもっている——

展示品はこのように朝鮮人民を鼓舞し、人民はいっそう立派な

展示品を付け足している。

これらの展示品を現場で見ることができた。

わたしは^{ファンヘ}黄 海製鉄所を訪問した。停戦当時の廢虚から雄々しく立ち上がった製鉄所は、以前の2倍の生産能力を備えていた。労働者たちは他国の力を借りずに、自分の力と技術、自らの手で溶鉱炉や平炉を建設した。なんでも自分の力でやり遂げるといふ高貴な精神はどこにもみなぎっており、この精神が共和国のすべてのものを創造へと導く。

わたしは工業都市咸興^{ハムフン}で、世界に誇る朝鮮人民の創造物であるピナロン工場を参観した。

先進的な科学者、技術者、労働者が創造したこの工場は、飛躍する朝鮮の同志たちの姿を世界人民の前に如実に示している。

^{リョンソン}竜 城機械工場では直径8メートルのターニング盤を製作して稼働させており、肥料工場でもまったく自分たちの力で増産していた。

朝鮮人民のこの輝かしい前進の力は、どこから来たものであろうか？

わたしは考えた。

これは、アメリカ侵略軍を打ち破った愛国的な精神力と戦闘力であると。英雄的に祖国を守り抜いた力がそのまま社会主義建設の原動力になっているのである。

アメリカは平壤と全朝鮮に朝鮮の人口と同じ数の爆弾を投下した。彼らは甚だしく破壊された朝鮮を満足の目で見たかもしれない。

しかし米帝国主義者は誤算した。彼らは朝鮮の山河を焼き尽くすことはできたが、平壤市民、朝鮮人民の士気をくじくことはできなかった。かえって朝鮮人民の士気を何倍にも高めたただけであった。

彼らの打算とは裏腹に、朝鮮人民は社会主義楽園を短期間により大きく華麗に築いた。

チョンリマの進軍は工業と農業ばかりでなく、科学・文化の分野においても立派に成し遂げられている。

わたしは大劇場で舞踊劇を観覧した。

大劇場は芸術、建築分野における朝鮮人民の誇りであり、舞踊劇『遊撃隊の娘』は高い政治性、強い民族性、豊かな芸術性の3位1体を具現している。

民族的形式を高い政治性をもって発展させることは、真に芸術を愛し育成する社会主義社会でなくては不可能なことである。

朝鮮の革命伝統を継承発展させた芸術として、祖国解放のために立ち上がったパルチザンの英雄的闘争を形象化したこの舞踊劇は、朝鮮がいやがうえに発展した芸術の国だということを余すところなく見せている。

日本人であるわたしは、日本帝国主義に抗する闘争を主題にしたこの舞踊劇で強烈な感銘を受け、目頭を熱くした。

わたしはサーカス劇場での公演も観覧した。

若い俳優たちの見事な演技や全メンバーが一つに溶けこんだ集団の美しさと、その楽天性は、社会主義サーカスならではのことである。

戦前、日本にもサーカスがあった。それは哀愁にみちた暗いも

のであった。悪漢によって拉致された子どもたち、売りとばされてきた不幸な娘たちがムチにうたれながら行う涙ぐましいその演技は、もの淋しい雰囲気をかもしていた。

戦後、日本は人民の闘争によってこのようなサーカスはなくなった。しかし、明朗な芸術的なサーカスを生む社会的条件はまったくないのである。そのため、現在日本ではサーカスを観る機会がなくなった。

わたしは平壤でサーカスを観ながら、純真な演技と美しい民族衣装にうっとりときどきとれた。俳優たちの生き生きとした喜びにあふれる表情、その演技は、とりもなおさず彼らの幸せな生活の反映であろう。このサーカスを広く日本人民に見せてあげたいという欲求がこみあげた。

社会主義のもとではサーカスが断然芸術の一部門として育まれている。この明るいサーカスを観ることができる平壤市民は幸せである。

わたしは放送芸術劇場で放送芸術家たちと夕刻を楽しく過ごす機会があった。

ここでわたしは民族的情緒豊かな旋律にたいへん感動した。伝統的な旋律と民族楽器を発展させるということは、社会主義でなくてはできないことである。

そしてまた、ここで社会主義における立派な漫才を見た。言葉は理解できないが、通訳から大まかな内容を聞き、演技を見ると、これこそ真の漫才であると思った。

人びとに笑いを与える芸術は社会生活になくってはならないもの

である。

この簡単で奇抜な芸術形式が朝鮮人民に広く愛されているのは当然のことである。

資本主義社会にも漫才はある。

しかしそれは、政治性と社会性がなく、暇つぶしとして中味のない笑いをさそうだけのものである。社会の矛盾を風刺する笑いをさそうことができないこのような種類の漫才は、人びとに害を与えるだけで、なんの教訓も与えることができない。

政治、社会科学、文化その他のすべての分野で前進をつづける朝鮮人民の姿は、実に世紀の壮観である。

労働党時代こそ朝鮮民族の歴史でかつてなかった開花期と言えよう。

朝鮮革命博物館や祖国解放戦争記念館などは、これを雄弁に物語っている。

金日成将軍が指導した遊撃隊の革命伝統が祖国を独立させ、アメリカ侵略軍を撃退させ、社会主義建設を実現させているのである。

朝鮮労働党と朝鮮人民の革命史は、わたしにとって無尽蔵の教訓の宝庫である。

このたび行われた最高人民会議は、アメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から追い出す唯一の道を明示した。

北半部の建設は統一朝鮮の礎であり、北半部人民の南半部人民に対する崇高な同胞愛は、必ず、3000万人民を団結させ、アメリカ侵略軍を追い出してしまおうであろう。

わが日本人民もまた、日本共産党の指導のもとにアメリカ帝国主義者を日本から追い出し、日本と南朝鮮の反動たちの野合を粉碎するためにたたかっている。

日本では来たる7月1日に参議院の選挙が始まる。日本人民は、朝鮮最高人民会議が世界各国の国会に送る書簡を支持する進歩的な議員を一人でも多く選出しなければならないであろう。

池田政府はアメリカの支配層の命令に従って、そして日本独占資本の利益のために『日韓会談』再開の方針を公言している。日本独占資本は南朝鮮に対し大きな関心を持っており、すでにこれに浸透している。

われわれは、日本の軍国化と『東北アジア軍事同盟』ねつ造の野望を決して許してはならない。

日本人民は朝鮮人民と協力して『日韓会談』を破綻させなければならない。

日朝両国人民は共通の敵アメリカ侵略軍を日朝両国から追い出すために共同闘争を進めよう！」

日一日と新しい創造のニュースが伝えられている時代——チョンリマ時代の朝鮮の現実を生き生きと伝える記事であった。

11. 侵略者と人民は違う

朝鮮がチョンリマ（千里馬）を駆る勢いで目覚ましい発展を遂げていた頃、朝鮮に対する日本政府と親米的な右翼政治家の態度は総じてきわめて挑戦的であった。彼らは、日本が朝鮮を植民地支配していた時に犯した数々の罪業について、謝罪はおろか日本の植民地統治が朝鮮に恩恵をもたらしたと公言し、日本が南朝鮮を再び侵略し支配するのは当然なことだとしていた。

「韓日会談」が開かれていた1953年10月、日本側首席代表久保田貫一郎は、「36年間、日本が韓国を強制占領したことは韓国民に有益であった」と公言した。

1958年6月、「韓日会談」日本側首席代表沢田廉三は、「われわれが立ち上がって38度線を鴨緑江アムロクの向こうへ押しやらなければ、先祖に対して、先輩に対して面目ない。これは日本外交の任務である」との暴言を吐いた。

「韓日会談」日本側代表らのこうした発言は、日本支配層の本心を代弁するものであった。

以下、彼ら支配層の発言を再録してみよう。

1960年1月23日、衆議院にて首相岸信介は、「日本の自衛権は南朝鮮と台湾にまで及ばなければならない」と言明した。

1962年1月、首相吉田茂は、「日本は伊藤博文の道に沿って朝鮮に扶植しなければならない」と述べた。

1962年4月23日、首相池田勇人は、「過ぐる40年間の韓国占領期間、日本が韓国を開発しておいたので、韓国に対して借りはないと思っている」と述べた。

首相佐藤栄作は、日本軍国主義者が「大東亜共栄圏」という語とともに、アジア制覇を正当化するために好んで使った「八紘一宇」という語を極力弁護し、「戦後に、この『八紘一宇』は帝国主義の表現だとか侵略主義の別称だとか言う人もいるが、わたしはどうしても『八紘一宇』の真意はそういった帝国主義的なものではないと思う。日本が明治以来台湾を経営し、朝鮮を併合し、満州に5族共和の夢を実現しようとしたことが日本帝国主義だと言うなら、それは栄えある帝国主義である」と述べた。

1962年9月、外相大平正芳は、米国務長官ラスクと「韓日会談」に関して一連の合意を見た後、ラスクに「アメリカは多くの売り場を受け持っているデパートの売り子みたいで、そのほかにも立派な売り場を持っているので、韓国という売り場にまでは手が回らないようだ」と言った。

1963年4月5日、首相池田勇人は、「韓国民族に対する日本の研究はアメリカよりずっと進んでいるが、日本は韓国に関連して40年以上の経験がある」と述べた。

彼らの一連の暴言は朝鮮人民の憤激を呼び起こし、世界の進歩的人民を驚愕させた。

こうした時、朝鮮民主主義人民共和国創建15周年慶祝行事に参加する日本社会党国会議員団と日朝協会代表団が平壤に到着した。

空港には「栄えあるわが祖国朝鮮民主主義人民共和国創建15周

年万歳！」「賓客のみなさんを熱烈に歓迎する！」と書いた横断幕が掲げられていた。

代表団がタラップを降りると、待ち受けていた勤労者たちが手旗や花束を振って熱烈に歓迎した。

その夕、日本社会党国会議員団は記者会見を行った。記者会見には平壤市内の新聞、通信、放送の記者が参加した。

席上、山本幸一団長は、朝鮮の友人たちの盛大な歓迎に謝意を表すとして、次のように述べた。

「わたくしたち日本社会党国会議員団は朝鮮対外文化連絡協会の招きにより、今し方到着しました。

日本では朝鮮民主主義人民共和国は『近くて遠い国』と呼ばれています。そのため、わが日本社会党は貴国訪問を熱烈に希望しながらも、なかなかその機会を得ることができず、この度ようやく社会党を代表する初の使節団として訪問することになりました。

これは、言うまでもなく、池田政府が、貴国における偉大な社会主義建設の発展と日朝両国人民の提携を恐れて、両国間の一切の往来と交流を妨害しているためです。

しかし、日朝間の友好関係発展は両国人民の一貫した希望であるため、誰も妨げることはできません。

実際に、日本の多数の人士が池田政府の圧迫と難関を克服して貴国を訪問しており、その中にはわたくしたちの同志もたくさんおり、貴国の歓待を受けました。

………

まだ日本に居住する朝鮮人も祖国の社会主義建設の発展に励ま

され、また日本の民主勢力の強力な支持のもとに、今、『祖国往来』を実現するために勇敢にたたかっています。

わが日本社会党もこのたたかいを全幅的に支持しています。

在日朝鮮人の『祖国往来』がついに実現される日も決して遠くないと確信しています」

山本氏は、日朝間の友好的な往来および交流とともに、今日、両国人民の前には祖国の完全独立とアジアの平和維持のための多くの共通の問題があり、たたかいがあると指摘し、こう続けた。

「アメリカ帝国主義と池田政府が陰謀を巡らせている『日韓会谈』を打破し、東北アジア軍事同盟実現の陰謀を粉碎しなければなりません。

アメリカ軍を自国の領土から撤退させ、その軍事基地を撤去しなければなりません。そしてまた、すべての核兵器を廃棄し、核戦争を阻止するためにたたかわなければなりません。

こうした共通の諸問題に直面しているため、日朝両国人民の戦闘的友誼は、祖国の完全独立と民族の統一を達成し、アジアの平和を保障する道となります。

わが日本社会党は、貴国における『千里馬』的な社会主義建設に深い敬意を表するとともに、それが朝鮮の民族統一の確固たる物質的基礎となると確信しています」

山本氏は、疾風のごとき発展を遂げている朝鮮民主主義人民共和国の栄えある創建15周年を朝鮮人民とともに慶祝できることをこのうえなくうれしく思うとし、朝鮮に滞在する期間は短い、日朝両国人民の友好関係と連帯の強化のために、アジアにおける

平和維持のために、朝鮮の指導者たちと胸襟を開いて意見を交換するつもりであり、朝鮮人民とできるだけ広く接触して所期の目的を達成するつもりだと述べた。

金日成主席との会見を期待していた社会党代表団の願望は1963年9月19日に実現した。

その間、社会党代表団は朝鮮民主主義人民共和国創建15周年記念行事に参加し、代表団を歓迎する平壤市民集会にも参加していた。

会見席上、主席は歓迎の意を表し、「団長先生が立派な演説をして朝鮮人民のたたかいを励ましてくれたことに謝意を表します」として、あなたがたは昨日帰国する予定だったが、わたしに会えなかったため日程を延ばしたそうだが、すまなく思う、あなたがたもご存知のように、今わが国には共和国創建15周年記念行事に参加した多くの外国代表団が滞在しているので、あなたがたに会うのが少し遅くなった、理解してもらいたい、あなたがたのこの度のわが国訪問が、朝鮮労働党と日本社会党間の関係を強め、朝鮮と日本両国人民の友好関係を発展させるうえで重要な契機になるものと思うと前置きして話を続けた。

「朝鮮と日本は海を隔てた近くの国であり、両国人民は今後親密な間柄になれると思います。

かつて日本は他国を侵略する罪業を犯しました。もちろん、これは日本帝国主義者が犯したのであって、日本人民が犯したのではありません。朝鮮人民はわが国を侵略した日本帝国主義者を血塗られた仇敵と見なしていますが、日本の広範な人民と進歩的人

士に対してはそう考えていません。

われわれは、かつて日本が犯した罪業の歴史が二度と繰り返されないようにするため、日本人民と手をとってたたかう用意があります。

朝鮮人民はアジアの平和を守るため、日本人民とともにたたかっていくでしょう」

一同は、日本政府上層部の暴言には一切触れず、自分たちと打ち解けて話を進める主席の言葉に熱心に聞き入っていた。

主席はそんな彼ら一人一人に温かい視線を投げかけ、今日、朝日両国人民には、アメリカ軍を自国から追い出し、自由かつ平和に暮らせる条件を整え、アジアの平和を守るために、ともにたたかわなければならぬ共通の任務が提起されている、今、世界の平和と安全を蹂躪し、朝鮮の平和的統一を妨げているのはほかならぬアメリカ帝国主義者であると強調して、アメリカ帝国主義の侵略的本性について言及した。

「アメリカ帝国主義は、南朝鮮に足を踏み入れたその日からわがもの顔に振る舞いながら、無辜の人民や愛国者を手当たりしだいに検挙、投獄し、虐殺し、今もあらゆる蛮行をためらうことなく働いています。アメリカ帝国主義は、共産主義の『侵入』を防ぐだの、共産主義の『侵略』から『保護』するだのと言って、南朝鮮を自分たちの植民地、軍事基地にし、わが国に対する新たな侵略戦争を挑発しようと狂奔しています。

アメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から追い出すことなしには、朝鮮の平和的統一を成し遂げることができず、朝鮮人民が平和に

暮らすことができません」

主席は、アメリカ帝国主義侵略軍を南朝鮮から追い出せば、朝鮮の平和的統一に有利であるのは言うまでもなく、日本の安定を保障するうえでも有利であり、ひいてはアジアの平和を守るうえでも有利である、日本人民もアメリカ軍が自国を占領しているのをよく思っていないだろうとして、こう続けた。

「今、アメリカ軍は日本に駐屯して、日本を自分たちの軍事基地にしています。われわれは、アメリカ軍が日本でもわがもの顔に振る舞いながら、あらゆる悪事を働いているだろうと考えています。したがって、アメリカ軍を追い出すことなしには、日本人民も自由に暮らすことができません。

ですから、朝日両国人民が共同でたたかって、アメリカ軍を南朝鮮と日本から追い出さなければなりません。そうしてこそ、両国人民の共通の念願が実現されて自由に暮らすことができ、アジアの平和を守ることができます。

朝鮮労働党と日本社会党は、アジアの平和を守り、朝鮮と日本間に善隣関係を結ぶためのたたかいを強力に展開すべきです。

朝鮮と日本が善隣関係を結んで仲よくし、ともに発展するのは悪いことではありません。わたしは、あなたがたもわが国が早く富強になるのを悪く思わないだろうと信じています。隣国同士ともに豊かに暮らしてこそ仲よくでき、互いに助け合いながら早く発展することができます。

朝鮮と日本間に善隣関係を結ぶためには、まず両国間に多方面にわたる交流が実現されなければなりません。ところが今、日本

政府の非友好的な態度のため、朝日両国間にはまだ交流が実現されていません。

われわれは常に扉を開け放っています。扉を閉ざすのは愚かなことであり、国が滅びる道です。

………

今、日本政府は、わが国の代表団が日本を訪問するのを必死に反対しています。日本にも共産党があり、外国の多くの共産党代表団が訪れているのに、日本政府がなぜわが国の代表団が日本へ行くことだけはそんなに反対するのか理解できません。日本政府は、日本に住んでいる朝鮮人に南朝鮮には往来させながらも、共和国北半部に往来するのは禁じています。これは、日本政府がわが国に対して差別・敵視政策を実施していることを意味します。

今、朝鮮と日本間に往来と経済・文化交流が実現していない原因は、日本当局が反対していることにもありますが、アメリカ帝国主義が裏で日本政府に圧力をかけていることにより大きな原因があると思います。南朝鮮の為政者たちや日本の当局者たちはアメリカ帝国主義を離れては生きることができないので、アメリカ帝国主義の要求と圧力に屈して彼らの言いなりになっています。あなたがたがどう考えているかは存じませんが、わたしは、わが国と日本間の往来と経済・文化交流の実現を妨害している基本張本人はアメリカ帝国主義者だと考えています」

主席は、この度日本社会党は国会議員団の朝鮮訪問を実現させるため、日本政府と頑強にたたかって初めて平壤へ行ける旅券を手にしたとのことだが、非常によいことだと思う、今後は数人規

模の代表団ではなく、両党の人士と両国の人民が互いに自由に往来できるようにするために積極的にたたかうべきだと述べた。

これに応じて代表団団長は、日本に帰ったら今後、朝鮮代表団の日本訪問の実現をはかって尽力すると語った。

主席は謝意を表明し、しかし、わが国代表団の日本入国問題が解決するまでには少し時間がかかるだろうと、微笑して言った。

「この問題がすぐに解決されないからといって、あなたがたがすまなく思うことはありません。今後、民主主義のための日本人民の大衆運動が盛り上がれば、朝日間の交流問題も漸次解決されるでしょう。

朝日間の交流は相互平等の原則に基づいて行われなければなりません。

関係部門の活動家の報告によると、最近、日本の記者たちがわが国を訪問したいと提起したことがあったそうです。日本の記者たちがわが国を訪問したいと提起したのは歓迎すべきことです。

しかし、わが国の当該機関では日本記者のわが国訪問を承認しませんでした。それは、わが国の記者たちが日本を訪問したいと提起した時、日本政府が拒絶したことに関連しています。

われわれは、国家間の関係は絶対に一方的なものや不平等なものになってはならないと認めます。国家間の関係はあくまでも平等でなければならず、相互主義の原則に基づいて結ばれなければなりません。世界には大きな国と小さな国はあっても、地位の高い国と低い国はありえません。国家間では常に平等と互惠の原則を尊重しなければなりません。どの国も他国の内政に干渉しては

ならず、国際法もすべての国に公正に適用されなければなりません。われわれは、こうした原則をただ資本主義諸国との関係においてのみ守るのではなく、社会主義諸国間の関係においても守らなければならないと主張します。そうしなければ、国家間に従属と支配の関係が許容されるようになります。そのため、わが国の活動家は、日本の記者たちがわが国を訪問したいと提起した時、それに同意しなかったのです。それ以外に理由はありません。

われわれは日本社会党のたたかいを支持します。日本社会党と日本人民が『日米安保条約』の改悪と『韓日会談』に反対して積極的にたたかっているということをよく耳にしています。この席に参加した代表団の方々は国内で『韓日会談』に反対してたたかったとのことですが、われわれはあなたがたのたたかいを有り難く思っており、今後、正義のためのたたかいで大きな成果を収めるよう期待しています。

われわれは今後、朝鮮労働党と日本社会党間の関係を良好に発展させるつもりです。これは両国人民の利益のためにも必要です。

日本社会党が政権を握ることができなかったからといって、それが両党間の平等な関係を発展させるうえでの支障にはなりません。われわれは、わが党と連係を持っているすべての党に平等に対しており、彼らとの友好を発展させるために努力しています」

主席の言葉の端々には、日本社会党に対する強い支持と共感の意がこもっていた。

代表団一同は、朝鮮に来て各所を参観し、多くのことを見聞き感じたところもごも語った。

主席は、わが国を見て感じたことがあったら忌憚なく話してほしい、われわれはそれを少しも悪く思わない、互いによい意見を交換しながら助け合ってこそ友好をさらに深めることができると言った。

彼らは、朝鮮の諸工場を見て感じたことは、自立的民族経済を建設し、生産と人々の思想改造を同時に推し進めていることだとし、これには深く感動したと述べた。

彼らの所感を聞いた主席は、これまで日本社会党は総聯の活動をいろいろと支援してくれた、総聯議長と日本から帰国した同胞たちから、あなたがたが総聯と緊密な係を保ち、総聯の活動をいろいろと助けているという話を聞いた、日本社会党はわれわれが在日朝鮮同胞の帰国を実現させるためのたたかいを展開した時にも、われわれを積極的に支持してくれた、われわれはそれを忘れておらず、有り難く思っていると、重ねて謝意を表した。

会見は終わった。

一同は、思慮が深く、人間味に富んだ主席に魅せられ、別れを惜しんだ。

主席は団長の手をとり、団長先生は帰国したら、訪朝期間に見て感じたわが国の社会主義建設の模様を自党に具体的に報告し、朝鮮人民が表した友好の情を日本人民に伝えると言われたが、感謝する、帰国したら、日本社会党の党员と日本人民に朝鮮人民の連帯の挨拶を伝えてほしい、そして、今後わが国に多くの代表団を送ってもらいたい、わが国には名勝も多い、わが国にたびたび来て休息をとり、参観もするのがいいだろう、朝鮮人民は善意を

もってわが国を訪れるあなたがたをいつも温かく迎えるだろうと言った。

主席の接見を受けて帰国することになった山本幸一団長は、平壤を発つに当たって別れの挨拶を述べた。

氏は、社会党使節団は朝鮮対外文化連絡協会の招きによる2週間の朝鮮訪問を終え、帰路に就くことになったとして、自分たちを誠心誠意歓迎し、細かく気を配ってくれた朝鮮人民に心から感謝すると述べ、滞在期間、自分たちは朝鮮民主主義人民共和国創建15周年慶祝行事に参加して朝鮮の社会主義建設の発展を祝ったとして、長時間にわたって友好の情あふれる雰囲気の中で自分たちに会ってくれた金日成主席への謝意を表した。

氏は、朝鮮訪問の所感についてこう語った。

「共和国を訪問し、みなさんがおのおのの仕事場で社会主義建設の高峰をめざして、7カ年計画を遂行するために奮闘している姿を見て、非常に深い感銘を受けました。

特に、日本から帰国した人たちが勤労戦線で自負と自信を持って働いている姿は、わたしたちにとって非常にうれしいことでした。

今日、日本にいる60万を超えるみなさんの同胞は、アメリカ帝国主義と池田政府の二重の抑圧のもとで生活しながら、彼らの祖国——朝鮮民主主義人民共和国への自由な往来を要求してたたかっています。

日本人民は、在日朝鮮公民のこうしたたたかいを全幅的に支持しています。

わたしたちはまた、貴国の党と政府と人民が一体となってアメリカ帝国主義に反対し、祖国の自主的統一をめざしてたたかっていることに深い感動を覚えました」

氏は、日朝両国人民はアメリカ帝国主義の侵略政策と軍事的冒険によって共通の環境に置かれており、共同でたたかわなければならない使命を担っているとして、次のように続けた。

「わたしたちは当面、まず『日韓会談』を打破して、南朝鮮を引き続き占領し、『東北アジア軍事同盟』の結成を企図するアメリカ帝国主義の陰謀を粉碎しなければなりません。

わたしたちは貴国を訪問して、平和と完全独立のために日朝両国人民の国際連帯を強め、『日韓会談』を断固粉碎する決意を新たにしています。

今日、日朝両国間には、アメリカ帝国主義と池田政府によって人士の往来、文化・経済の交流など全面的友好発展の道が閉ざされていますが、なんぴとも友好と連帯を強めるという両国人民の意志を抑えることはできません。

わたしたちは、日朝両国人民が相互の友好関係を全面的に発展させる日が必ず来ることを確信するとともに、われわれの訪朝がこの事業に重要な貢献をなしたと信じています。

金日成元帥をはじめ指導者たちの厚い配慮に心から重ねて謝意を表し、朝鮮のみなさんの熱烈な歓迎と温かい友情を胸に刻んで帰国するしだいです」

かわいらしい朝鮮の少女たちから贈られた花束を胸に抱き、群衆の歓呼の声を背に受けながらタラップを上る彼らは、人類の平

和と友好をめざす道で、信頼を寄せ、愛情をそそいでくれた金日成主席に対する感謝の念にあふれていた。

12. 「韓日会談」の即時中止を一 金日成主席の回答

1964年4月17日、ロイター通信はワシントン発のニュースとして、日本を訪問して帰国した米国防次官ジルパトリックの次のような発言を伝えた。

「アメリカは、日本が太平洋西北部の防衛をこれまでより多く受け持つべきだと考えている。特に、日本が将来、朝鮮半島の一部を含む地域を守るのに十分な『監視的戦闘力』をもつことを期待している。そうすれば、韓国で再び紛争が起こった場合も、韓国はアメリカの師団再増強に依存する必要がなくなるだろう」

これに先立つ同年1月30日、南朝鮮の東洋通信は、米國務長官ラスクは日本と南朝鮮を訪れ、「2月中に本会談を開き、5月に国交正常化を実現するよう要求した」と報じた。

アメリカの積極的な督励と露骨な干渉のもと、日本政府と南朝鮮当局は第6次「韓日会談」を1964年3月に締めくくって4月に調印し、5月に批准することに合意した。しかし、この計画は、同年3月24日に始まってたちまち南朝鮮全域に広がった青年学生と人民の「韓日会談」反対闘争により挫折した。

こうした状況下で共同通信社の岩本清専務理事は、1965年4月、ジャカルタ特派員を通して、バンドン会議10周年記念行事に参加するためインドネシアを訪問していた金日成主席に、国際情勢と

日朝関係に関する質問を提起した。

その時の質問と回答は次のとおりである。

問 「日韓会談」で懸案の諸問題が原則的に合意に達しましたが、貴国と日本の将来および南北朝鮮統一の観点からどのようにお考えですか？

答 「韓日会談」に対するわが政府の立場はすでに度重なる声明を通じて表明されました。

もともと「韓日会談」は、アメリカが「東北アジア軍事同盟」を結成して、日本軍国主義勢力をアジア侵略の「突撃隊」に利用する目的で仕組んだものであり、ここで日本政府は、アメリカの侵略計画に積極的に加担する代価として南朝鮮に浸透しようと企み、ひいてはアジア支配の昔の夢を実現しようと妄想しています。

南朝鮮「政権」は、南朝鮮をアメリカ帝国主義と日本軍国主義の二重の植民地として売り渡してでも、崩壊しつつある自分の傀儡統治地盤を維持し、わが祖国の分裂を永久化しようとして「韓日会談」を積極的におし進めています。

「韓日会談」は、朝鮮の平和的統一を妨げ、日本軍国主義勢力の対外膨張を実現しようとするものであって、朝日両国人民の根本的利益にひとしくそむくものであります。

朝鮮民主主義人民共和国政府と朝鮮人民は、アメリカ帝国主義者の指図を受けて南朝鮮傀儡政権と日本政府が進めているこのような陰謀に決定的に反対します。

「韓日会談」で論議されている懸案の問題について言えば、南

朝鮮傀儡当局と日本政府がいかなる合意に達しても、それはすべて無効であります。

南朝鮮の傀儡政権は、アメリカ帝国主義の銃剣によって作りあげられたものであり、それは絶対に朝鮮人民を代表することはできません。

朝日両国間の関係で歴史的に生じた諸問題は、朝鮮人民の総意を代表することのできる統一された朝鮮人民の政府が樹立された後に、公正かつ合理的に解決されなければなりません。

現在、南北朝鮮の全人民の間では、「韓日会談」に反対する怒りに満ちた闘争が力強く繰り広げられており、とくに南朝鮮青年学生たちの強力な反日、反政府デモが再び繰り広げられはじめました。

「韓日会談」に反対する闘争は、日本人民の間でも広範に繰り広げられています。

朝鮮人民は日本人民のこの正義の闘争に全面的な支持と連帯を送っています。

犯罪的な「韓日会談」は粉碎されなければならず、朝日両国間の関係はあくまでも両国人民の利益にかなうよう、平和と友誼に基づいて正常化されなければなりません。

問 貴国の経済状態はどうであり、これと関連して日朝両国間の貿易をどう発展させたらよいか、具体的にどのような構想をおもちですか？

答 わが国の人民経済は社会主義制度の優位性と朝鮮人民の勤勉な労働によって、たえず速いテンポで発展しています。

工業と農業生産が急速に成長し、いま人民経済のすべての部門で全面的な技術革命と広範な建設事業が進められています。

われわれは、すでに民族経済のゆるぎない自立的土台を築きあげ、他の国ぐにとの通商関係を広く発展させることができるようになりました。

現在、わが国と他の多くの国ぐにとの貿易関係は日増しに拡大発展しています。

日本との貿易関係について言えば、それはもっぱら日本政府の態度にかかっています。日本政府当局が朝日両国間の貿易関係の発展に人為的な障害をつくりださず、非友好的態度を改めるならば、両国間の貿易は発展するでしょう。

問 現在のアジア情勢のもとで、日本に対してどのような期待、あるいは要望をおもちですか？

答 われわれは、日本がアメリカ帝国主義の従属から脱し、真の平和愛好国としてアジアの隣接諸国との善隣関係を発展させるようになることを期待します。

問 貴国と日本との政治的・経済的関係を改善するためにはどのような条件が必要だとお考えでしょうか？

答 朝鮮民主主義人民共和国政府は、隣邦である日本と正常な関係を結び、善隣関係を発展させるために常に努力しています。しかし日本政府は、朝鮮民主主義人民共和国に対して引き続き敵視政策をとっています。

われわれ両国間の関係を改善するためには、なによりも日本政府がこのような政策を改めることが必要です。

現段階において日本政府は、南朝鮮当局と不法に進めている「韓日会談」を即時中止し、すでに仮調印した協定を廃棄すべきであります。

13. 革新陣営の主張は正しい

1965年4月19日、金日成主席は、『日本経済新聞』酒井辰夫、布施道夫両記者の質問に次のように答えた。

問 日本の社会党、共産党をはじめ革新陣営は、いま進行中の日韓交渉が南北朝鮮の統一をはばむものだとして反対しています。朝鮮統一の可能性について、どのような見解をおもちですか？

答 「韓日会談」に反対する日本の社会党と共産党をはじめ革新陣営の主張は全面的に正しいものです。

「韓日会談」は、南朝鮮を米日帝国主義の二重の従属に追いこむことによって、南朝鮮における植民地支配をいっそう強化しようという目的を追求しています。

また、日本政府を代表する公式的人物が再三露骨に述べているように、「韓日会談」は朝鮮民主主義人民共和国を直接敵視する前提のもとに進められています。したがって「韓日会談」は、朝鮮の平和的統一をはなはだしく妨げるものです。

日本政府は朝鮮の平和的統一を阻み、ぐらつく南朝鮮傀儡政権を救うために、日本の軍隊を南朝鮮に派遣することまでアメリカ政府とひそかに合意しました。

しかし、アメリカ帝国主義と日本軍国主義勢力がいかに結託しても、南朝鮮における植民地支配機構が崩壊し、朝鮮民族が再び

一つに統一されるのを阻むことは決してできないでしょう。

朝鮮民主主義人民共和国政府は、南朝鮮からアメリカ帝国主義侵略軍をはじめ一切の外国軍隊を追いだし、いかなる外部勢力の干渉も受けることなく、民主主義的基礎のうえで行われる南北朝鮮の自由総選挙を通して平和的に祖国を統一することを一貫して主張しており、このために、いつでも南北朝鮮の間で協商するよう提案しています。

朝鮮民主主義人民共和国政府のこの正しい主張は、アメリカ帝国主義と南朝鮮当局の執拗な反対にもかかわらず、内外から大きな支持を受けています。

祖国の平和的統一の物質的裏付けとなる共和国北半部での社会主義建設の成果は、日を追ってますます大きくなっています。

南朝鮮人民は、すぐる20年間の苦しい体験を通じて、今日の悲惨な境遇から抜け出す唯一の道が祖国の平和的統一の達成にあることを自覚するようになり、反米救国闘争に力強く立ち上がっています。

南朝鮮人民は、自分たちに計り知れない苦しみをもたらし、わが祖国の統一を阻んでいるアメリカ帝国主義者とその手先を決してそのままにはおかないでしょう。

朝鮮問題は、南朝鮮人民の反米解放闘争を通じて、南北朝鮮人民の団結した力でわが祖国が平和的に統一されることによって解決されるでしょう。

14. 安心してついていける人

畑中知加子氏は、1950年、朝日新聞社をレッドパージで退社後、1952年アジア・太平洋地域平和会議準備会事務局長を務めた平和運動家畑中政春氏の夫人である。畑中政春氏は1955年アジア諸国民会議国際書記局員としてニューデリーに常駐していた時期に日朝協会を設立し、その理事長を務めた。1964年に原水協代表理事となり、1966年にはアジア・アフリカ・ラテンアメリカ3大陸人民連帯会議に出席した。他に日本ジャーナリスト連盟副理事長も務めている。

1969年5月、平壤空港に降り立った畑中知加子氏は、可愛らしい少女たちからライラックと赤いバラ、カンナの花束を贈られた。

彼女は、朝鮮対外文化連絡協会の招きを受けた夫とともに朝鮮民主主義人民共和国を訪れたのである。

米軍大型偵察機「EC-121」撃墜事件の直後のことで、さぞ国内が緊張し、大変なことだろうと思っていた彼女にとって、平壤の印象はただただ驚くことばかりだった。

のどかな街路をさっそうと闊歩する労働者、色とりどりのチマとチョゴリに身をつつみ、楽しそうに語り合う婦人たち。

彼女はノートにこんな歌をつづった。

やわらかき 柳の緑 野辺の花

平壤の街 余りにも静か

街ののどかさは人々の態度にも現れていた。アメリカとの厳しい戦争を経て、あの廢墟から雄々しく立ち上がった朝鮮人民であることを、このもの静かな人々から、誰が想像することができようか。……

日が経つにつれ、彼女はだんだんと理解ができた。朝鮮人民は、どのような大事が起きようとも、すでに心の準備ができています。朝鮮人民の心は、金日成元帥の教えに従い、その導きのもとに進むならば、前途には勝利があるのみだという確信に満ちているのだ、と。

彼女は平壤の随所を見て歩き、朝鮮を導く金日成主席の指導の偉大さを実感した。それは金日成主席の謁見を受けた時から一層強まった。

彼女はその心情をこう書いている。

「私は金日成主席に直接お会いして、いつも人民とともに歩まれる主席の姿をみいだした。がっちりした体格、どこからともなくにじみでる威厳、かといっていかめしさはなく、いつもやさしい笑みをたたえて語る主席をみて、私はほんとうに国をまかせることのできる人、人民が安心してついていくことのできる人だと直感的に感じた。

人民への愛が、にじみでていた。

私はこの日、一国の主席がエレベーターの前まできさくに出迎え、心から歓迎してくれる姿に、ただただ恐縮するばかりであった。

わかりやすく順を追って静かに話される若々しい主席の顔が、ときどきくもるときがあった。それは南朝鮮のことを語るときであった。

私は朝鮮に滞在中、幸せにくらす子どもたちと婦人たちの生活が、とくに印象に残った。

朝鮮で一番大事な宝は子どもである。なんでも一番良いものを子どもたちにあたえ、国家的負担で何不自由なく育てている朝鮮。

通訳の人が『街で一番大きく、りっぱなものがあれば、それは金日成主席が子どもたちのために建てられた宮殿なのです』と誇らしげに語ってくれた。そのことば通り、私は平壤でも一番立派な建物を、すぐに見つけることができた。13階建ての学生少年宮殿は平壤の中心にある小高い丘の上にあった。建坪5万平方メートルの平壤学生少年宮殿は500の部屋のほかに劇場、娯楽室、体育館、図書館をそなえ、日に1万人の子どもたちが思い思いの課外活動を楽しめるようになっていた。もちろん費用は全額国家負担である。

心ゆくまで学び、とびまわる子どもたちの姿をみたとき、私は『ユンボギの日記』でよんだ南朝鮮の悲惨な子どもたちを思った。

金日成主席の顔をくもらせたのも多分、その子どもたちのことであり、子どもになにもしてやれない南の母たちの心情に思いを致しているのであろうと思った。

私は一日も早く南朝鮮からアメリカ軍がでていき、朝鮮が統一されて、南朝鮮の子どもたちも金日成主席のひざもとで幸せにくらす日が一日も早く来ることを願ってやまない。

私はその時、釜山^{プサン}から平壤に行きたいと思っている。

そして、金日成主席のおすこやかな姿にもう一度、ぜひお目にかかりたいと思っている」

15. 主席に贈った姫のし

人間は、心惹かれるところへ行くものである。

日本の著名な文筆家西谷能雄氏はその体験者の一人である。

明治大学卒業後弘文堂に入社した西谷能雄氏は、編集部長当時、まだ無名の作家木下順二氏の『夕鶴』の出版をめぐり会社と対立して1951年弘文堂を辞職し、退職金をもって買い取った『夕鶴』の紙型を処女出版とする未来社を設立して社長に就任した。

筆をもって人生の道を歩んできた氏は、並はずれた願望を抱いた。希世の偉人金日成主席になんとしても一度会うことであった。

その願望は遂にかなない、平壤を訪れた氏を乗せた車は内閣庁舎に向かっていた。1970年6月23日午後5時30分きっかり、車は内閣庁舎に到着した。エレベーターに乗ると、なんとも名状しがたい香りがエレベーター一杯に漂っていた。床に真紅のじゅうたんが敷きつめられ、真白の覆いのかかった低い椅子が置いてあった。隅の方に電話機があって、たいへん珍しいと思って見回していると、エレベーターは早くも停止して扉があいた。扉を出ると、そこに金日成主席がにこやかに立っていた。主席が扉の外で待っているようとは夢にも考えなかった氏はすっかりあわてた。

主席はやにわに手を差しのべて力強く握手をし、待ちかまえていたカメラマンに、すぐ記念撮影をしようと促した。しばしば写真で見てきた主席ではあったが、こうしてじかに会うことができ

た氏の一行は夢を見る思いだった。

後日、氏は「金日成首相の、どっしりした重味のある体躯と、満面笑みをたたえた人なつつこい顔がわたしのすぐ横にあった。この瞬間をどんなに待ち望んでいたことだろう。共和国への招待が決定してから、また平壤に到着してから、思えばわたしたちの心からの願いであった。今ようやくそれが実現したのだ。直接お会いできて、握手をかわすだけで、わたしの望みはすべてかなえられたといってもいい。それは本当に感激の一瞬だった。……

首相は無造作にわたしたちのところへやってきてケースを差し出し煙草を勧めてくださった。さてこの煙草を吸ったものかどうか随分迷った。そのときわたしは、チラッと、かつての『大日本帝国』の恩賜の煙草を思い浮かべた。折角頂いた煙草をそのまま吸ってしまうことがなんとなく惜しい気がした。日本にもちかえて、首相が勧めてくださった煙草です、といって朝鮮総聯の人たちにあげたらどんなに感銘深く喜んでくださるだろう、そんなことを考えた。しかしやはり吸うことにした。……前のテーブルにおいてある茶菓子もしきりに勧めてくださったが、この方はいに手を触れなかった。やはりあがっていたからであろう」と述懐している。

氏は、主席が会見で話したことをできるだけくわしく、正確に書きとどめておこうと思った。それは一つには、自分にとって歴史的な事件となったこの日の会見の模様を自分自身のためにも残しておきたいと思ったのである。もちろん、共和国について、金日成主席の人柄について、できるだけ多くの日本の人民と支配層

に知らせたいという願いがそこにあったことは言うまでもないだろう。

主席は一行に向かって、もっと早くお会いするつもりだったが、御承知のように、外国の客人が入れかわり立ちかわり来訪してなかなか会見の予定が立てられなかった、そのためにあなた方に会うのがこんなに遅れてしまって、本当に申し訳ない、あなた方のことは総聯^{ハンドケス}の韓徳銖議長からも、是非会ってくれるようにと言われていたから、是非会うつもりでいたと言い、こう続けた。

「シアヌーク殿下は、私の古い戦友であり親しい友人です。彼は今非常に気の毒な立場におかれている。それでしばしば彼と行をともにしており、今も旅行から帰ってきたばかりです」

一国の領袖であり、多忙を極めている金日成主席が、外国の一介の民間人になると言い訳をすることに驚いた氏は、会ってくれただけでも感激だったのに、誠実をきわめたその事情説明に大きなとまどいを感じ、そのような人間味ゆたかな誠実な指導者が他のどこの国にいるだろうかと考えた。

西谷氏は数年前自分がなめた苦い経験を思い出し、「勝てば官軍、負ければ賊軍」となる商売の世界、人情紙より薄い人間社会にあって、なんと美しい優しい心根であろうかと、笑いながらたんと語る主席の言葉に、人間の真実を見る思いがした。

主席は、ついでベトナム、ラオス、カンボジア等インドシナ半島の政治的・軍事的緊張関係と情勢のきびしさについてくわしく語り、朝鮮人民はこの闘争を積極的に支持し、援助の手を差しのべなければならない、アメリカ帝国主義をアジアから追い出さな

いかぎり、アジアの平和は絶対にありえないし、アジアの平和はアジア人民自身の手で守らなければならないと、力をこめて語った。

西谷氏はその時の感想を次のように述懐した。

「とても58歳とは思えないその若々しさ、顔だけみていると、あんな声はとうてい出そうもない。左右に、時に前後に、あの頑丈な身体を大きくゆすりながら、時に深々とソファーにもたれかかり、何の秘密もないような、おおらかな話し方、全くこだわりのないあけっぴろげな話術は、人を惹きつけるに十分だ。思うに日本帝国主義との20数年間にわたる抗日武装闘争、独立後間もなく起きた祖国解放戦争（朝鮮戦争）、その中であって、たえず人民と軍隊を叱咤激励してきた、その戦いの歴史がああ声の中に深くこめられているのだろう。そうとしか考えようがない。あの柔和な容貌からは、少なくとも表面的には革命の闘士としての面影は、微塵も見出すことはできなかつたし、また誇り高い一国の宰相・指導者として、虚勢などは一カケラも見当たらず、まさに庶民そのものであるとあっていい。内に烈々たる闘志を秘めながら、少なくとも外に柔らかく、内に剛毅な精神を保持しているのである。……

首相の話術はきわめて具体的で説得的で、たくみであった。原稿などはもちろん持たず、資料のメモさえ一つもなしに具体的に数字をあげるのに驚いた。実にいい記憶力というほかない。短く区切って、すぐに通訳を促すあたりは、つぼを心得たものである」

主席は、アメリカ軍、南朝鮮軍との海と陸における小戦闘につ

いてくわしく述べ、それは年に数千回もあるが、その主なものだけがマスコミに報道されているとし、残念ながら国防費はいまなお大きい、もし緊張がなくなれば人民のための建設に向けられるのに、とつけ加えた。

他にも青少年の教育問題、軽工業に力を入れる問題、南北朝鮮の統一問題について述べた後、1週間滞在を延ばしてゆっくり体を休めてはどうか、日本へ帰れば、また忙しくなる、遠慮しないでゆっくり休養していくように、と一行に勧めた。さいわい明後日25日は、平壤で大きな市民大会（南朝鮮からアメリカ軍を撤退させるための平壤市民集会）があるが、それも見物してはどうか、それを見物したからといって、日本の警察があなた方をつかまえることもないだろう、と言って笑った。

1時間半に及ぶ会見も、もはや終わろうとしていた。

主席は一行に、船は不便だし時間もかかる、モスクワを經由して帰れば早くて便利だと強く勧めた。

これに対し西谷氏は、平壤に来るのに私たちは数日間を費やした、だから航空便も必ずしも便利だとは言えない、飛行機で直行すればわずか2時間で来られるのだから、一日も早く朝鮮の統一を実現して、2時間で来られるようになることを私たちは心から願っている、と語った。

深くうなずいた主席は、ここでよど号のことを切り出した。

——実はあの事件のことで私たちは困っている。招かざる客の扱いに苦慮している。全く迷惑な話だ。事件が起きた時、私は平壤の近くの田舎町にいた。そこへ現地から電話がかかって事情を

知った。その折、日本から来た山村という次官がふるえているという。どうしたらいいかと指示を仰いできたというわけだ。われわれは帰りたいという人間をとどめておくようなことは絶対にしない。帰りたい人はいつだって自由に帰す。飛行機は日本のものだから返すのは当然だと思ったから返したまでだ。学生たちはこのまま日本に帰せば直ちに警察につかまって刑務所に入れられることは間違いない以上、彼らを簡単に帰すわけにはいかない。もちろんわが国では、彼らに働いてもらわねばならないほど労働力が足りないわけではないし、また残念ながら彼らを収容する刑務所も用意されていない。彼らにも親兄弟があつて帰りを待っていることだろう。できるものならこっそり帰してやりたい気持ちもないではないが、実際問題となればなかなかむづかしい問題がある。また外国へ送ることも考えてみたが、これも国際法上、外交上きわめて困難である。とにかく厄介な問題でその処置に困惑している。迷惑な話だ。しかしいつまでもこのままにしておくわけにもいかないので、目下関係当局にもっといい方法を検討させている――

西谷氏はこう答えた。

「私は日本政府の代表でもなければ組織の代表でもなく、日本人民の平凡な一人にすぎませんが、率直に申し上げます。このたびの事件について首相ならびに共和国政府のとられた寛大な処置に対して、日本人民の一人として心からお礼を申し上げますとともに、御迷惑をおかけしたことに對しても心から深くお詫びします。このたびのみごとな御処置については日本の全人民は、保守的な

人間も含めて大変感謝しています。このことによって、共和国への日本人民の理解はさらに一層深まったものと私は確信しています」

会見はこれですべて終了、主席も彼らも腰を上げた。

この時、西谷氏はつかつかと通訳の所へ歩み寄った。

室内には一瞬異様な緊張がただよった。人々はかたずをのんで、何ごとが起るのかと危ぶんだ。だがそれは一瞬の出来事だった。

「これは私の親しくしている日本のすぐれた劇作家・木下順二さんの、今年92歳になるお母さんが、首相の長寿を祈って、真心をこめて自分の手で作ってくださった姫のしというものです。これを是非、首相に差し上げて頂きたい。老母にあやかっただけでも長生きしてくださるようにとの願いがこめられた縁起のいい品物です」

怪訝な表情をしていた通訳はすぐに姫のしの意味を知ってその由来を主席に語った。

主席に差し出した姫のしは、日本の一老女が真心をこめてつくったものであった。説明を聞いた主席はにこにこして、「どうもありがとうございます。木下さんのお母さんにくれぐれもよろしくお伝えください。そしていつまでも長生きしてくださるように」と丁寧な礼を述べた。

木下順二氏の老母には主席の名で土産が届けられた。

その土産の品を持って帰国する西谷能雄氏は、主席の日本民族と人類への情こもる言葉を深く噛みしめていた。まさに、人間は心惹かれるところへ行くものである。

一番大切な方、それも一度も会ったことのない尊敬する金日成
主席に姫のしを贈った92歳の老女の心は、愛の大河へと注がれて
いく一条の谷水のように清く美しいものである。